

## 井戸遺跡と内野第1遺跡

田中 英世

### はじめに

今回は内野第1遺跡と、同遺跡と横橋貝塚の中間に位置する井戸遺跡の、縄文時代後期中葉から後半の資料を提示する。

### 1. 井戸遺跡について

遺跡は、千葉市花見川区横橋町に位置し、花見川支谷の北岸、標高22mの台地上に立地する。東3.5kmの分水嶺を越えた勝田川流域には内野第1遺跡（第1図1）が、西側下流1.5kmには横橋貝塚（第1図3）が存在し、井戸遺跡は両遺跡の中間地点にあたる。内野第1遺跡からは加曾利B式期と安行2式期のオキアサリを中心とした貝ブロック（D-369・J-114住居）が検出されており（第6図）、横橋貝塚→井戸遺跡→内野第1遺跡のルートで搬入され、さらには印旛沼南岸の千代田遺跡（第1図7）まで行っている可能性がある。なお、内野第1遺跡の北4kmに井野長割遺跡（第1図4）、北東4kmに神楽場遺跡（第1図5）、5kmに吉見台貝塚（第1図6）、東4kmに千代田遺跡（第1図7）がある。井戸遺跡は、加曾利EIV式期の埋設土器と奈良・平安時代の住居2軒が検出された。一枚田遺跡（第1図2）の南側の地点で、周辺には加曾利EIV～堀之内1式期の住居と貝ブロックが検出された馬場塚遺跡（第2図7）、縄文時代最終末の子和清水遺跡や房地遺跡がある（第2図8・9）。

遺跡は横橋小学校の校門前から校庭にかけて広がる。昭和61年に電気配線工事として立会調査が行われ、貝ブロック3ヶ所と炉跡状の焼土2ヶ所が確認されている（第4図）。これについては「一枚田遺跡」の第II地点として、第III地点とされた横橋小学校校門前の散布地表探資料と共に遺物が報告書に掲載されている（第3図）（註1・文献1）。

今回提示資料（第4図・第5図）は平成2年の試掘調査によるものある。「体育馆前1TV字溝」とされた地点では、細縫隙線上に指頭圧痕を施した壺之内2式の精製土器（1）と粗製土器（2）が出土。「3T褐色土（住居覆土）」とされた地点は「一枚田遺跡」の第II地点と同じ地点で、加曾利EIV式（3）・堀之内1式（4～9）・2式（10～11）・加曾利B2式（18～26）・注口土器（12・13）・吊手七器（26）が出土。貝ブロックは「3T土壤内」とされ、キサゴ・ハマグリ・オキアサリの他、バイ6点・クボガイ1点と鹿角・獸骨が含まれている（註2）。昭和61年と平成2年の調査により、一枚田遺跡と井戸遺跡は同一の遺跡と捉えられる。昭和61年の第I地点では加曾利E式・加曾利B式が主体を占め、第2地点では堀之内式が主体を占める。遺物

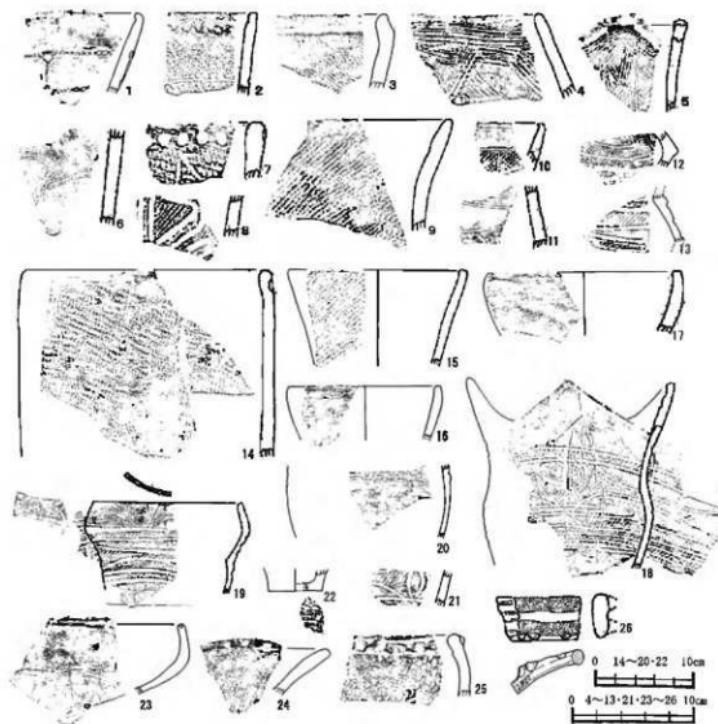


第1図 周辺遺跡分布図（国土地理院 1/5万「佐倉・千葉」）



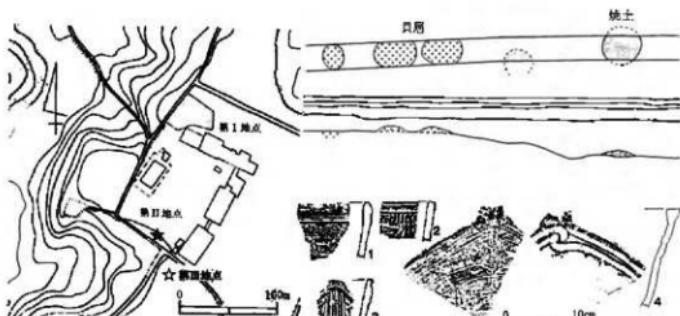
1. 井戸遺跡 2. 一枚田遺跡 3. 烟突遺跡 4. 外山遺跡 5. 篠辺遺跡 6. 猿橋貝塚 7. 馬場塚遺跡  
8. 子和清水遺跡 9. 房地遺跡

第2図 井戸遺跡周辺地形図（千葉市基本図を改変）縮尺不同

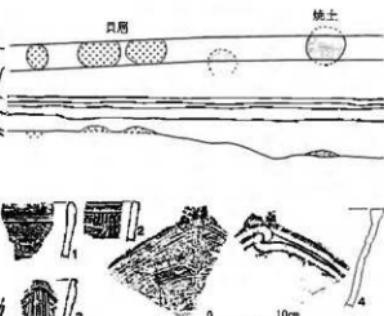


第3図 井戸遺跡出土遺物実測図 (1・2 体育馆前1T 3T褐色土(住居層土))

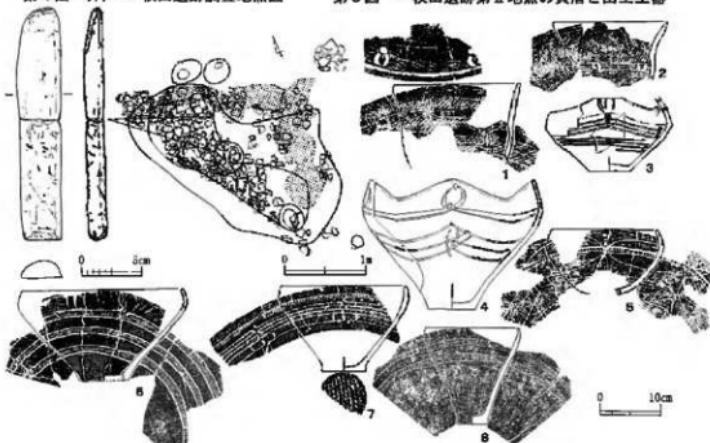
の出土状態からは、堀之内1式期の住居内に加曾利B式期の投棄貝ブロックが伴っている可能性がある。第3図18~21の加曾利B式土器は「対弧文」と呼称される土器群で、内野第1遺跡の貝ブロックが検出されたD-369からも出土し(第6図1)、時期的に繋がる可能性があり、千代田遺跡西斜面貝塚の下部貝層出土上上器にも近い(第7図)(文献2)。



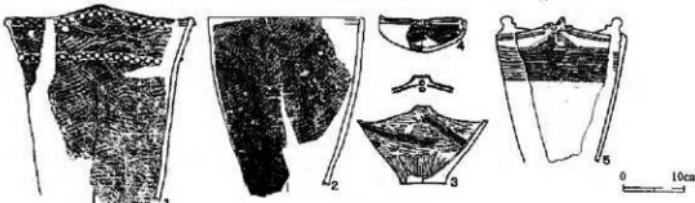
第4図 井戸・一枚田遺跡調査地点図



第5図 一枚田遺跡第II地点の貝層と出土土器



第6図 内野第1遺跡貝層検出土器(D-369)と出土土器



第7図 千代田遺跡西側斜面貝層出土土器

## 2. 内野第1遺跡出土の後期中葉～後半の土器群

当遺跡については報告書（文献3）の他に、包含層出土の後期前半と晩期前半および調整池出土の土器と、石棒・石剣の資料を提示している（文献4）。勝田川から晩期集中区第2地点の間には、標高14mの等高線に沿って、遺構集中区北側に緩斜面が形成されていたと思われ、これまで提示した資料はこの斜面に投棄されたものであり、調整池は下の地点になる。なお集中地点西側の、M-36と晩期集中区第2地点の間からは、高井東式の大形注口土器等が出土しているが、遺物の包含は極めて少ない（註3）。

今回は後期中葉～後半の土器群を提示する。第1地点-21U-6d・-10c・-10d・-11a・-11b、第2地点-21U-14d・-15b・-15c・-15d・-16a・-16b、第3地点-21V-2c・-3a、第4地点-21V-8b・-12a・-12c・-22V-9bの4ヶ所に遺物集中地点が認めら、これらは廃棄ブロックとして捉えられる。なお、年報16にも当該期の資料が多数掲載されているが、今回は分類のみ行った。分類には年報5（年報16のNo.5の土器）と表記した。時間とページ数の関係でドット図の検討は行っていない。また安行2式については前回の晩期の資料と共に提示してある。分類については時期で群別を、文様で類別を行い、器形で種別を行い、A-深鉢形土器・B-鉢形土器・C-台付鉢形土器・D-浅鉢形土器に分類し、軋製土器については第5群土器として一括した。これらは『吉見台貢塚A地点』（文献5）『下太田貢塚』（文献6）『市原市西広貢塚』（文献7）『印西市西根遺跡』（文献8）を参考にした。

第1群土器：加曾利B 1式土器

第1類B種：横線文帯を施す鉢形土器

1 a : 「い」の字状区画文をもつ土器 (273)

1 b : 鈎状区画文や「の」の字文をもつ横帯文を施す土器 (214)

第2類B種：円筒形で、外面はクランク文、内面は円形刺突と沈線文の鉢形土器 (183)

第2群土器：加曾利B 2式土器

第1類A種：頸部は括れ、胴部中央から口縁部に文様帯をもつ土器 (207・208・235・239)

第2類A種：「J」字状の磨消繩文を施し、胴部が直線的に開く土器 (251)

第3類A種：「つ」字状の磨消繩文を施す土器 (14)

第3群土器：加曾利B 3式～曾谷式土器

第1類A種1：平縁口縁に屈曲する頸部をもつ土器。胴部に斜条線を施す半精製深鉢形土器

1 a : 口縁部は斜条線、頸部は無文帯と連続刺突文、以下斜条線の土器 (12)

1 b : 1 a の形態で口縁部が細かい波状口縁を呈する土器 (60)

第1類A種2：波状口縁に屈曲する頸部をもつ土器。胴部に斜条線を施す半精製深鉢形土器

2 a : 口縁部は無文、頸部に連続刺突文を施し、以下は純文上に斜条線の土器 (4・年報78)

2 b : 口縁部直下と頸部に連続刺突文を加え、口縁部と胴部下半が斜条線の土器 (13・191・



第8図 内野第1遺跡遺構配置図

237)。191の胴部は横走の条線で以下縄文。

2 c : 1 b と同じで、口縁部が幅広の縄文帯の上器 (111・112・190)

第2類A種1：平縁口縁に小さい山形突起を持つ精製深鉢形土器。刺突文と短沈線が主文様

1 a : 口縁部直下と頸部は刺突文で、胴部上半は幅広の縄文帯、下半は短沈線の土器 (30・129)

1 b : 胴部上半と頸部に刺突文を加え、以下短沈線の土器 (126)

第3類A種1：平縁口縁で瘤のない深鉢形土器。頸部が括れ、口縁部が開く。胴部下半に矢羽

根状沈線文を施す。

1 a : 口縁部直下と頸部は刺突文、胴部上半は細い縄文帯、下半は矢羽根状沈線文 (52)

1 b : 口縁部直下と頸部は刺突文、胴部上半は連続弧線文、下半は矢羽根状沈線文 (114)

第4類B種1：口縁部が開く算盤珠状の鉢形土器。頸部は弧線文で以下斜条線 (189・216・257)

第4類B種2：口縁部が内傾する算盤珠状の鉢形土器。口縁部は幅広の縄文帯、頸部の刺突文

以下は短沈線 (275)。

第5類C種1：頸部で扁曲し、口縁部が大きく開く台付鉢形土器。条線・短沈線が主文様

1 a : 口縁部は斜条線、頸部は無文帯と刺突文、胴部は条線文 (84・85・110・120・188・  
218・264・265)

1 b : 口唇部に刺突、鉢部上半に短沈線 (174)

第5類C種2：小形上器。口唇部に刺突、胴部上半に短沈線 (226)

第6類D種1：4単位の波状口縁で、頸部に沈線を施し以下短沈線を施す土器 (107・185)。185

は口唇部に刺突を加える。

第7類D種：沈線を主文様とする浅鉢形土器

1 : 口縁部が経の狭い無文帯で、胴部が稜形状の土器 (145)

2 a : 口唇部と頸部に刺突文、頸部以下は斜条線の土器 (105・146)。146は刺突文を欠く

2 b : 2 a の小形品で、口唇部直下と胴部下半の沈線間に斜条線を充填する土器 (109)

3 : 口唇部は短沈線で鋸歯状充填し、胴部下半は短沈線の土器 (186・213)。213の底部は磨  
消縄文を施す。

4 : 頸部に短沈線を配し、底部外周に連続刺突文を巡らす土器 (147)

第8類A種1：大波状口縁に、扁曲する頸部をもつ上器。胴部に磨消縄文を施す精製深鉢形土  
器。第1類A種2と器形は類似

1 a : 口縁部直下と頸部が刺突文で、上半は無文、下半は連続弧線文の土器 (1)

1 b : 口縁部直下と頸部が刺突文で、上半は縄文帯、下半は対向弧線文の土器 (102・113・179)

1 c : 口縁部直下は刺突文で、上半と下半は連続弧線文の土器 (39・167)。167は瘤が付く。

1 d : 口縁部は無文、頸部は刺突文で、以下幅広の縄文帯 (247)

第9類A種1：所謂瓢形を呈する土器

1 a : 脊部上半は連続弧線文、下半は対向弧線文の土器 (41・266)

1 b : 脊部上半に細い縄文帯を有し、下半は対向弧線文の土器 (68・215)

1 c : 脊部上半は幅広の縄文帯を有し、下半は連続弧線文の土器 (87・244)。244は脣部の刺突文を欠く

1 d : 脊部上半は対向弧線文の土器 (42・74・95・104・210)

第10類A種：平縁口縁の土器で、帶縄文が無く、細い沈線と瘤を有する土器

1 a : 脊部上半は連続弧線文、下半は対向弧線文の土器 (138)

1 b : 口縁部は刻目と幅広の縄文帯、下半は連続弧線文の土器 (164)

第11類B種：脣部下が半円形を呈し、口縁部が大きく開く土器

1 : 頸部に刺突を加え、以下縄文を施す丸底の土器 (43・年報2)

2 : 頸部と脣部下に沈線を施し、間に縄文を施す平底の土器 (11)

3 : 大形の土器で、口縁部直下に沈線を施し、楕円形の棒状文を構成する土器 (249)

第12類B種：碗状の丸い脣の土器

1 a : 磨消縄文を施す土器 (205・229)。205は「ト」の字状の磨消縄文

2 b : 縄文のみの土器で、下方に無文帯を設けている土器 (66・67・83・103・151・209・245・246・263・年報69)

5 : 肥厚する口縁部に刺突を加え、以下磨消縄文を施す土器 (38)

第13類D種 I : 瘤を有し、口縁が開く浅鉢形土器

1 a : 口縁部直下に幅の広い凹線を施し以下無文の土器 (46)

1 b : 口縁部直下に細い沈線を施し以下無文の土器 (16・88)

1 c : 口縁部に瘤を有し、幅広の凹線を施す土器 (241)

1 d : 口縁部直下に細い沈線を施し、以下磨消縄文の土器 (32・121・152・240・262)

第14類B種：無文の土器

1 : 口縁部が直線的に開く鉢形土器 (10・45・187・274・年報17・年報43)

2 : 無文で、底部が丸底の鉢形土器 (8)

3 : 口縁部直下に沈線を施し、間に細かい刺突を加え、以下無文の土器 (242)

4 : 梗状の丸い脣の土器 (148・221・年報70)

5 : 梗状の丸い脣の土器で、沈線のみの土器 (228・236)。236は舟形土器

第4群土器：安行1式土器

第1類A種 I : 平縁口縁の土器で、口縁部に2~3条の帶縄文と縦長の瘤を有する土器

1 a : 口縁部直下と頸部は刺突文、頸部上半は幅広の縄文帯、下半は連続弧線文の土器 (86)

1 b : 脣部上半は連続弧線文、下半は連続対向弧線文の土器 (258)

1 c : 脣部に櫛掛の弧線文を押す土器 (18)

1 d : 脊部に連続対向弧線文を持つ土器 (19・157)

第2類A種1：所謂瓢形を呈する土器

1 : 脊部上半は帯縄文と櫛掛状の充填縄文、下半は連続弧線文の土器 (21・165・166・169・170)

2 : 脊部上半は瘤が付く帯縄文、下半は櫛掛状又は連続 (155・171・172)

第2類A種2：燕尾状の把手と、口縁部に縱長の瘤が付く帯縄文有する土器 (140・141・204)

第3類B種1：口縁部に帯縄文と瘤を持つ深鉢形土器 (269)

第3類D種1：口縁部に3帯の帯縄文を持つ浅鉢形土器 (181・年報72)

第5群土器：粗製土器

第1類A種1：底部から口縁までや内湾しながらも直線的に開く土器で、口縁部に指頭圧痕の紐線文を施し、以下縄文地文上に条線を施す土器 (78・98)

第1類A種2：口縁部が内湾する紐線文土器

2 a : 脊部上半に指頭圧痕の紐線文で連続弧線文と遮光器文を構成する土器 (135)

2 b : 口縁部に指頭圧痕の紐線文を施し、縄文のみの土器 (119・212・217)

2 c : 口縁部に指頭圧痕の紐線文を施し、以下縄文地文上に条線を施す土器 (65a・73)

2 d : 連続爪形文の紐線文を口縁部と頸部に持つ条線のみの土器 (29)

第1類A種3：口縁部が外湾し、頸部を持つ紐線文土器。

3 a : 口縁部に指頭圧痕の紐線文を施し、以下縄文地文上に条線を施す (65b・77・93)

3 b : 指頭圧痕の紐線文を口縁部と頸部に持つ土器で、縄文地文上に頸部と脇部下半に異方向の条線を加える (25・26・117・118・142・178・年報78)

3 c : 指頭圧痕の紐線文を口縁部と頸部に持つ土器で、縄文地文上に頸部と脇部下半に同方向の条線を加える (24・63・71・72・134 a・194・223・238)

3 d : 口縁部に指頭圧痕の紐線文を施し、以下条線 (206)

3 e : 3 b の縄文を欠く土器で、頸部と脇部下半に異方向の条線を加える (97・年報15)

3 f : 3 c の縄文を欠く土器で、頸部と脇部下半に同方向の条線を加える (33・54~58・64・79・94・134 b・173・195・197・198)

3 g : 3 c の頸部上半に縱の平行弦線を施す (6)

第1類A種4：紐線文が置換または消滅した土器

4 a : 紐線文が沈線に置換し、間に連続爪形文施す土器。地文は斜条線 (59・180)

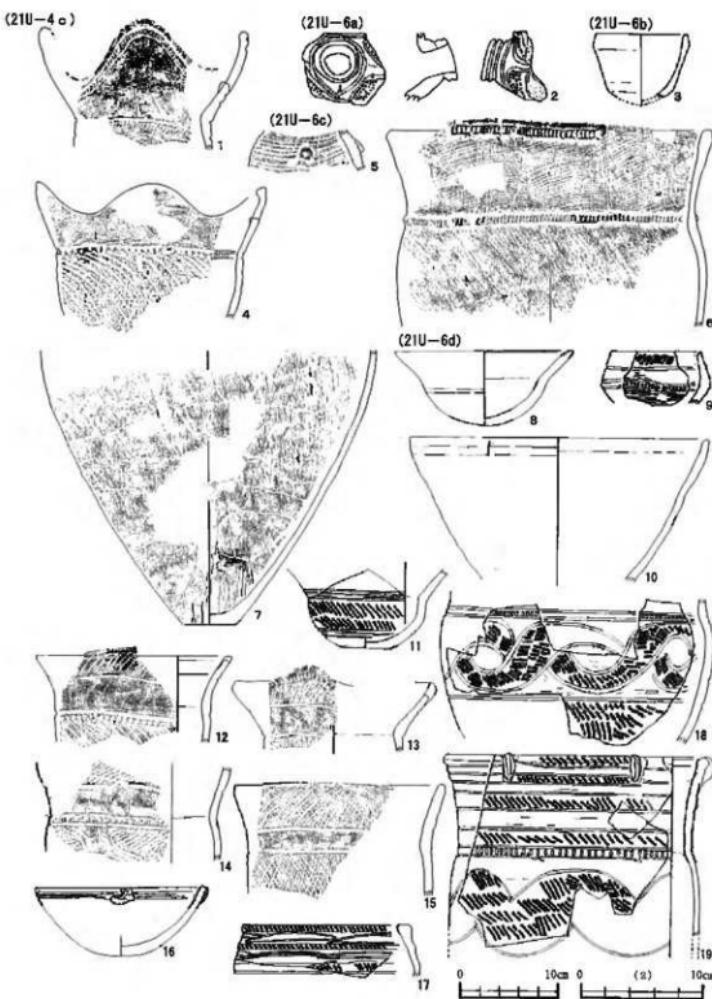
4 b : 紐線文が置換した連続爪形文を、口縁部と頸部に施す土器。地文は斜条線 (27)

4 C : 地文の斜条線のみ (28)

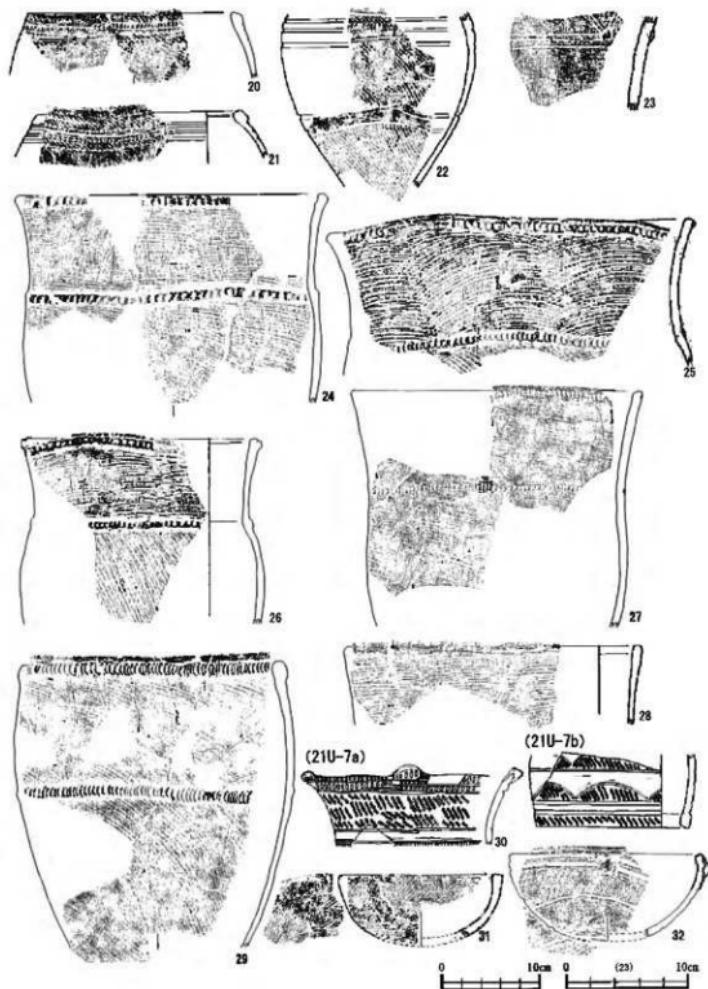
4 d : 紐線文がなく、縄文地文上の脇部上半に、横の条線を施し縦の蛇行沈線を加える (92)

第1類A種5－格子目文系土器

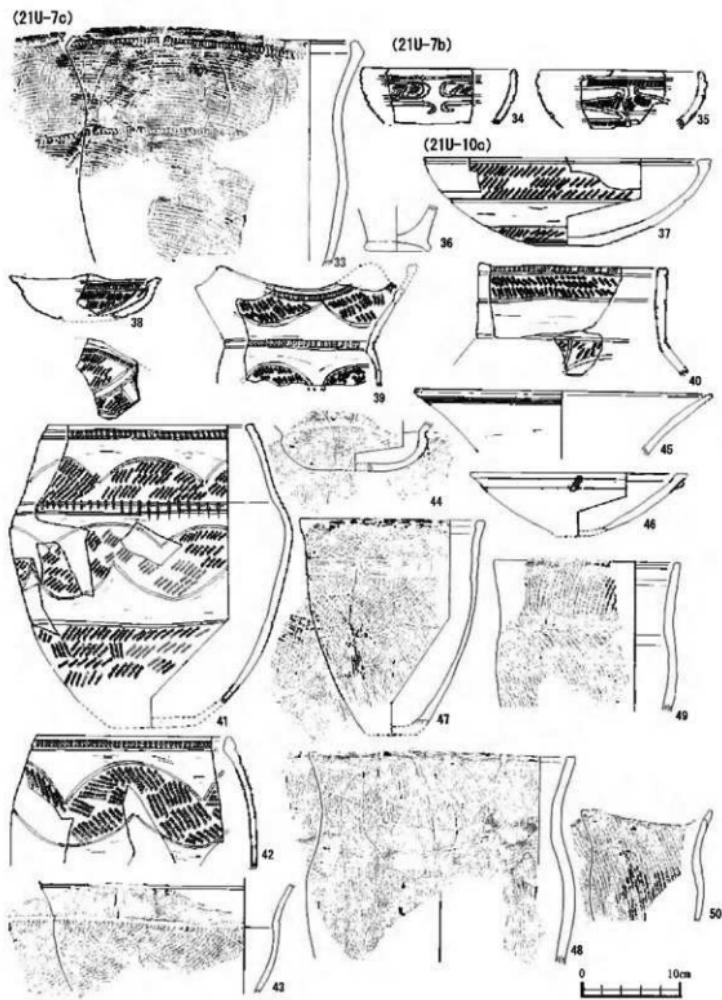
5 a : 沈線内に無文帶を有し、格子目文を施す土器。遠部台4類 (15・47・76・年報10)



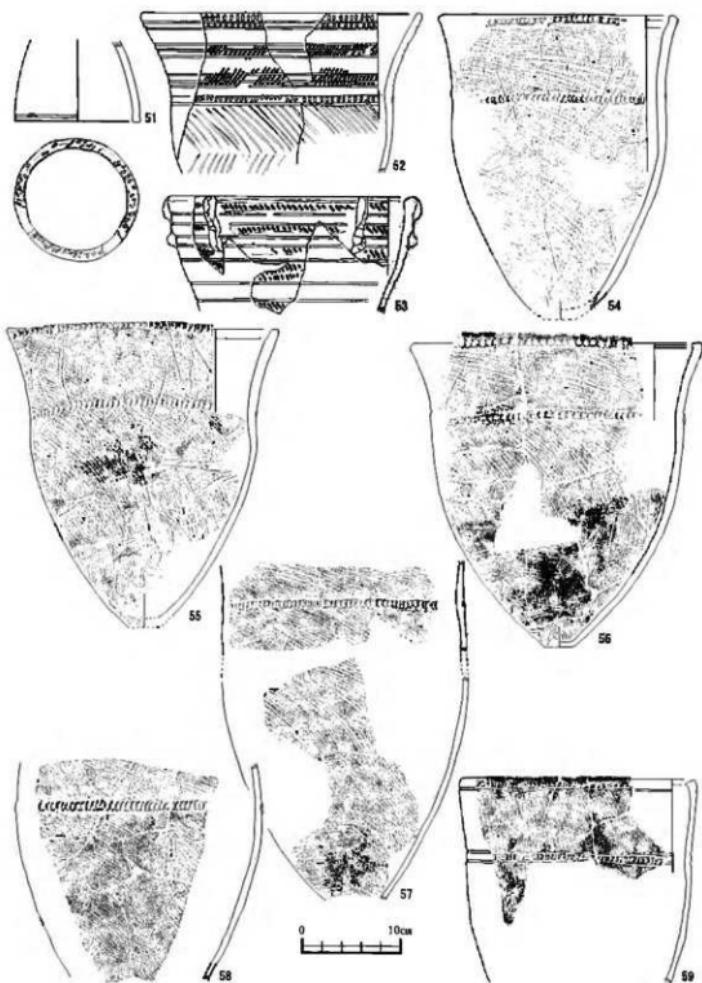
第9図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-4c~6d)



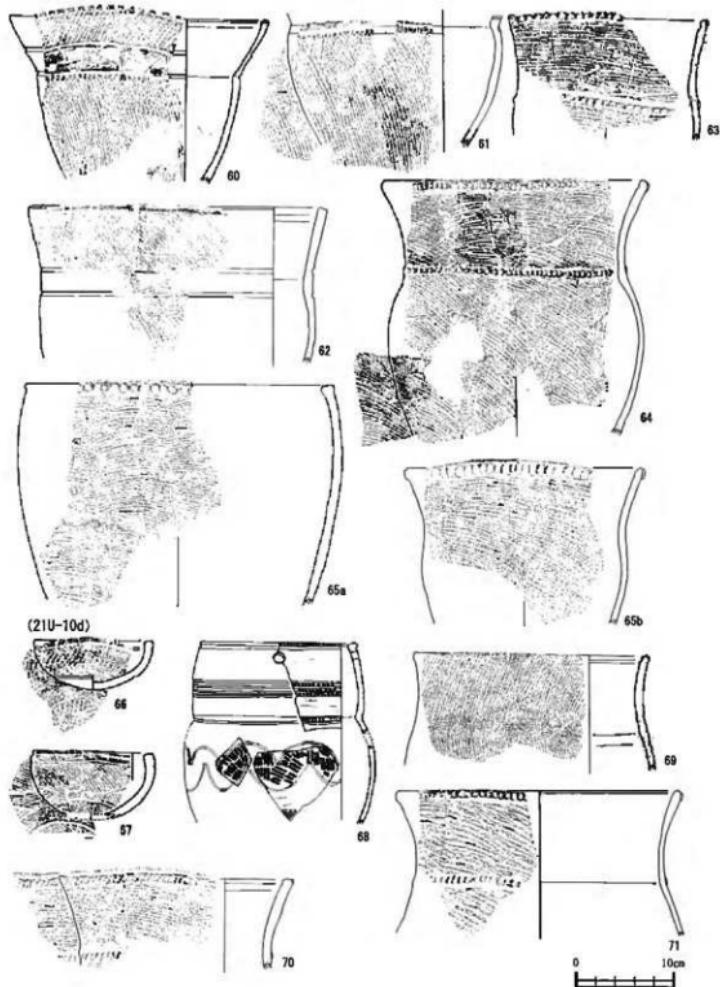
第10図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-6d~7b)



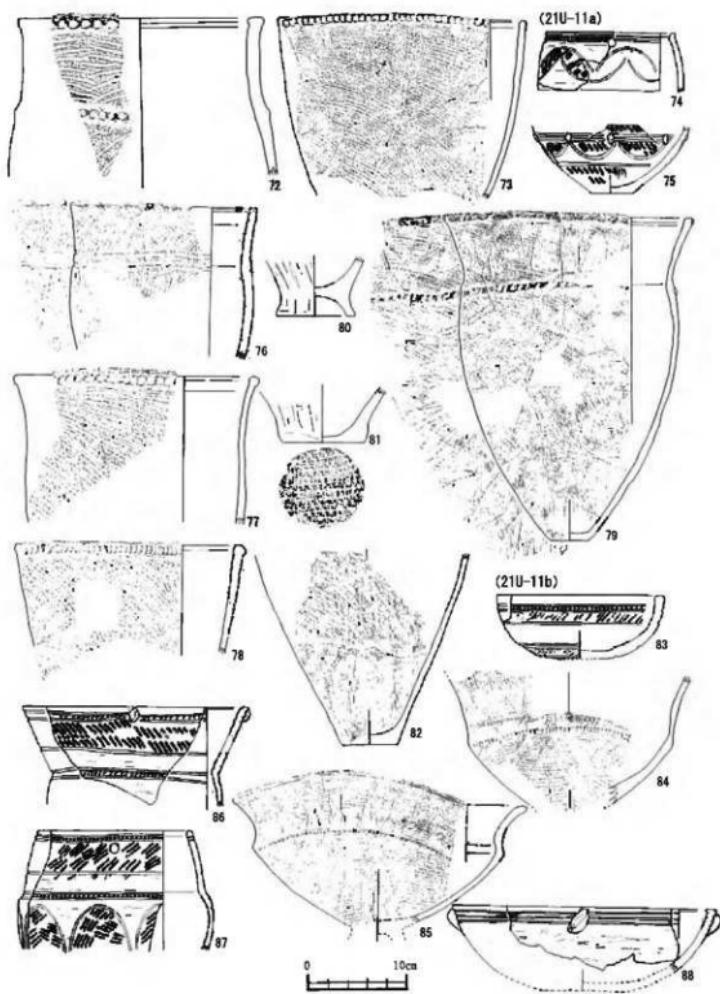
第11図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-7c~10c)



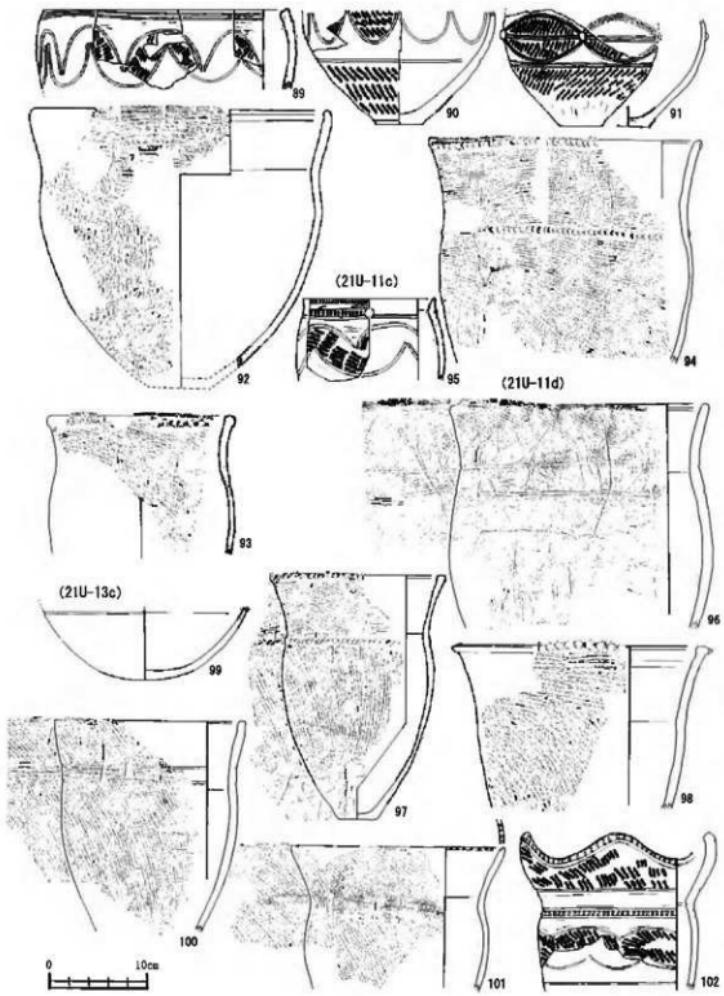
第12図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-10c)



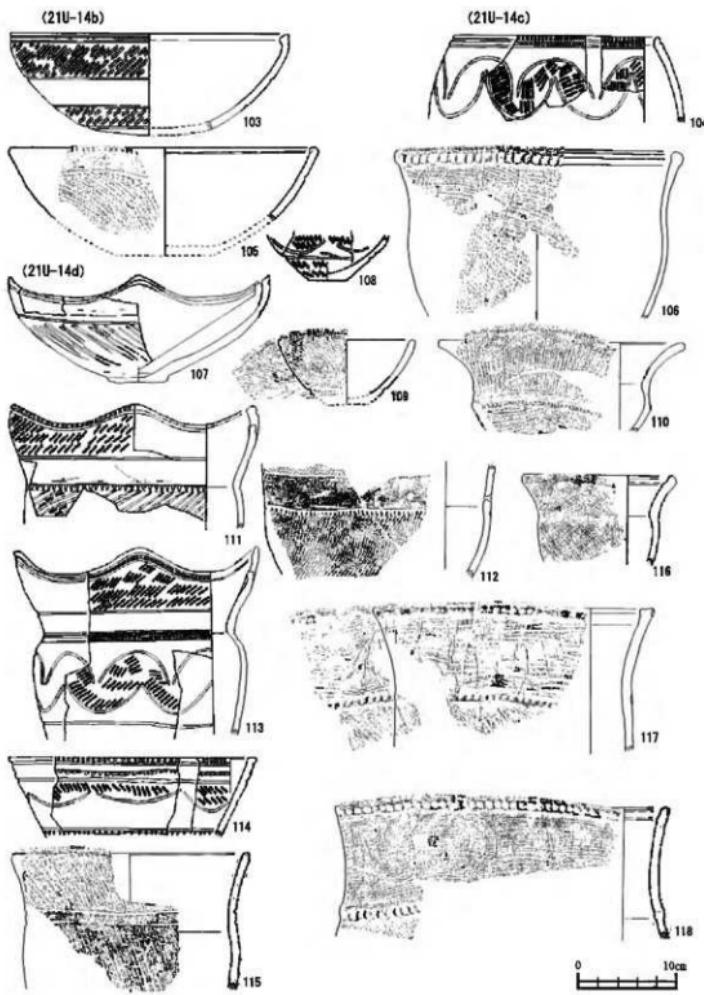
第13図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-10c・10d)



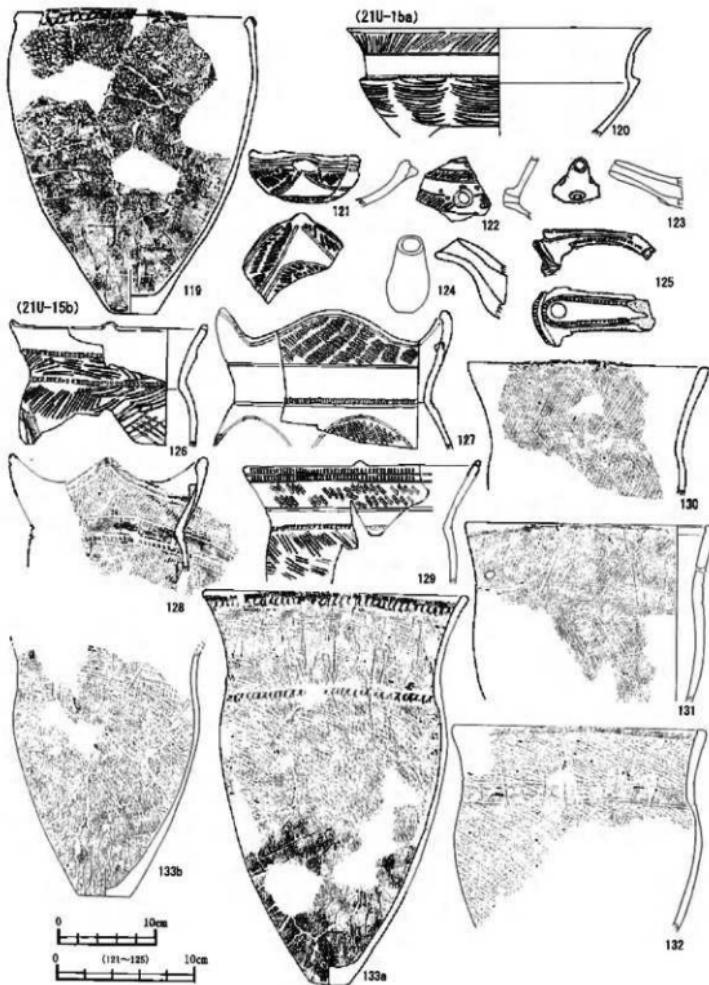
第14図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-10d~11b)



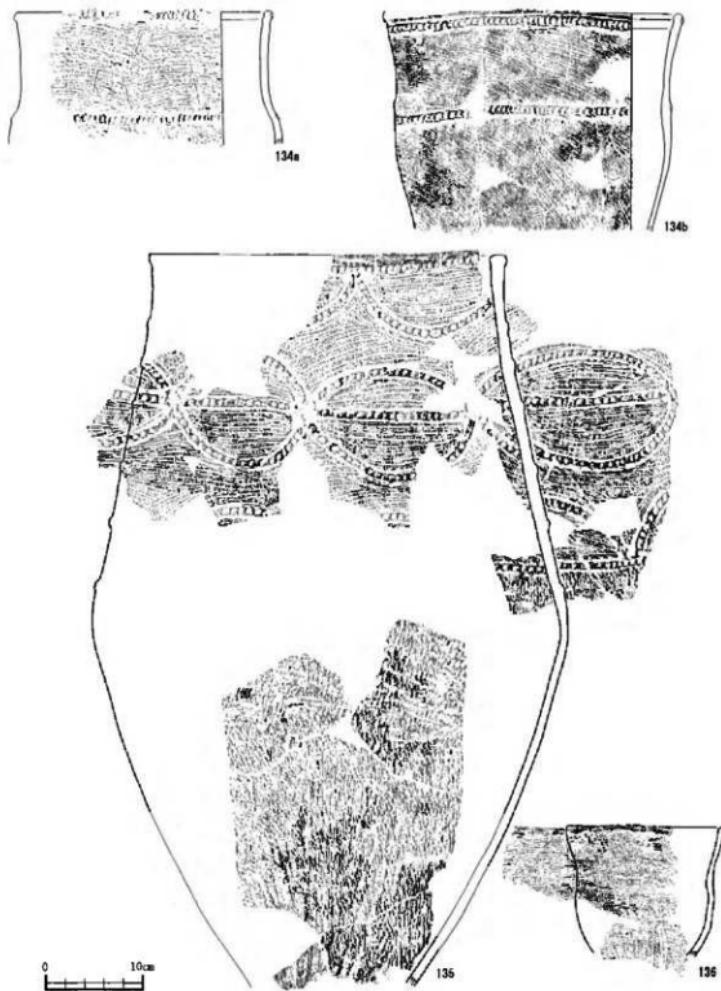
第15図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-11b~10d)



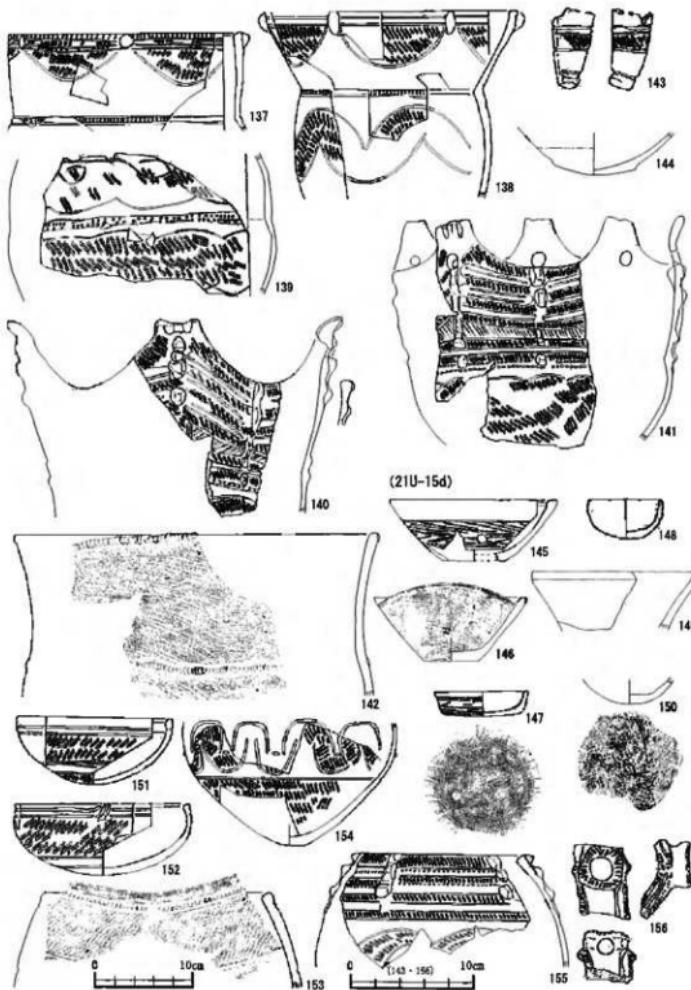
第16図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-14b~14d)



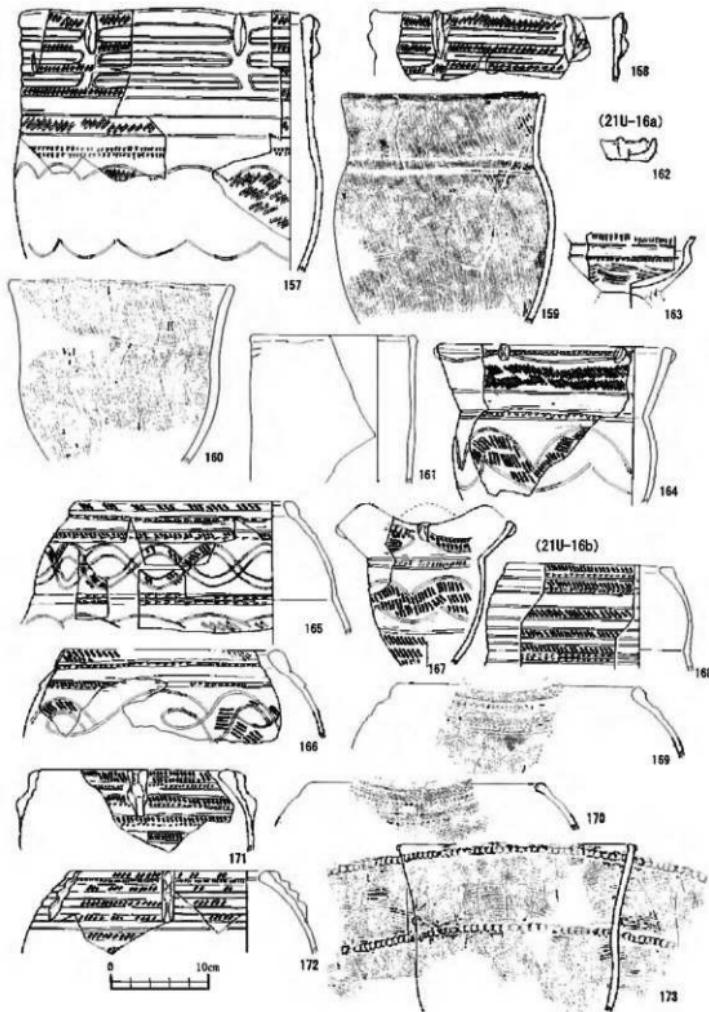
第17図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-14d~15b)



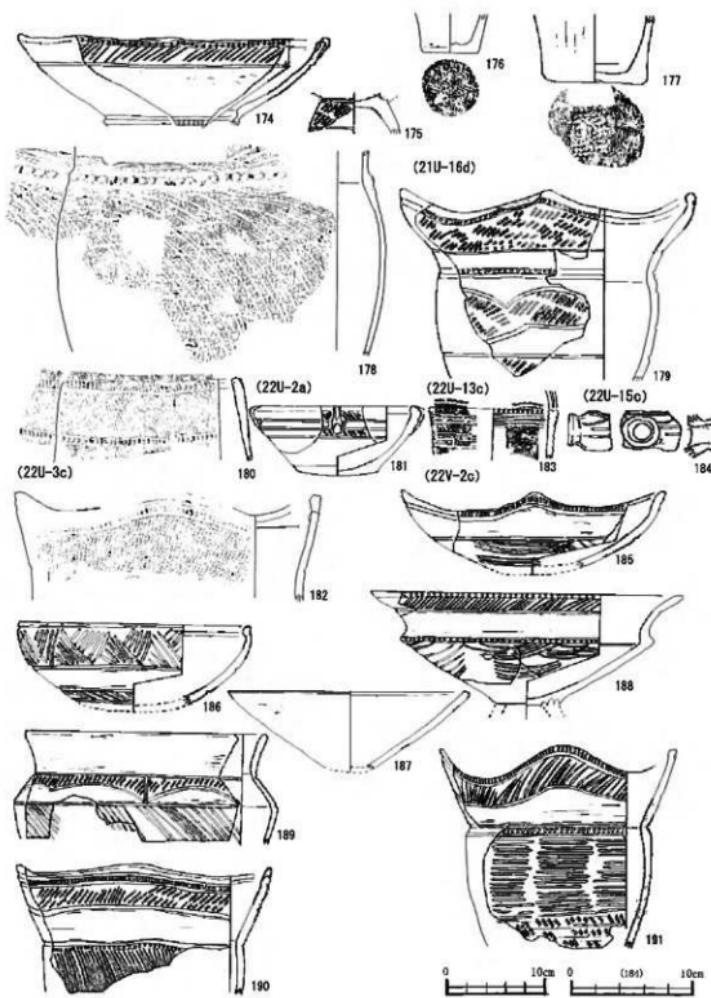
第18図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-15b)



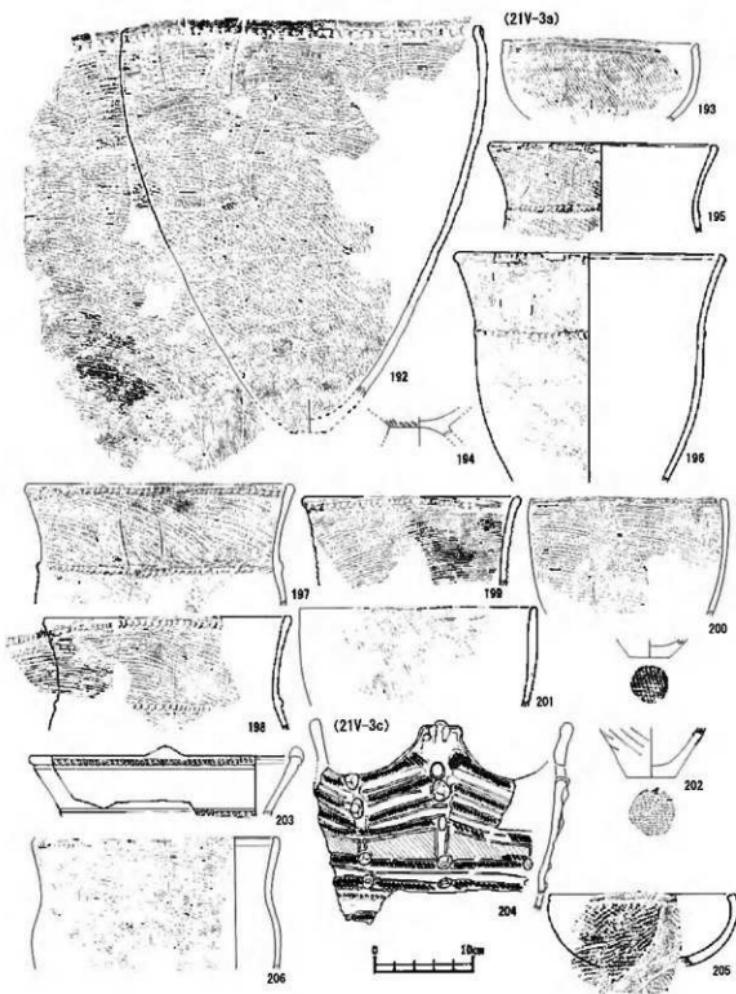
第19図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-15b~15d)



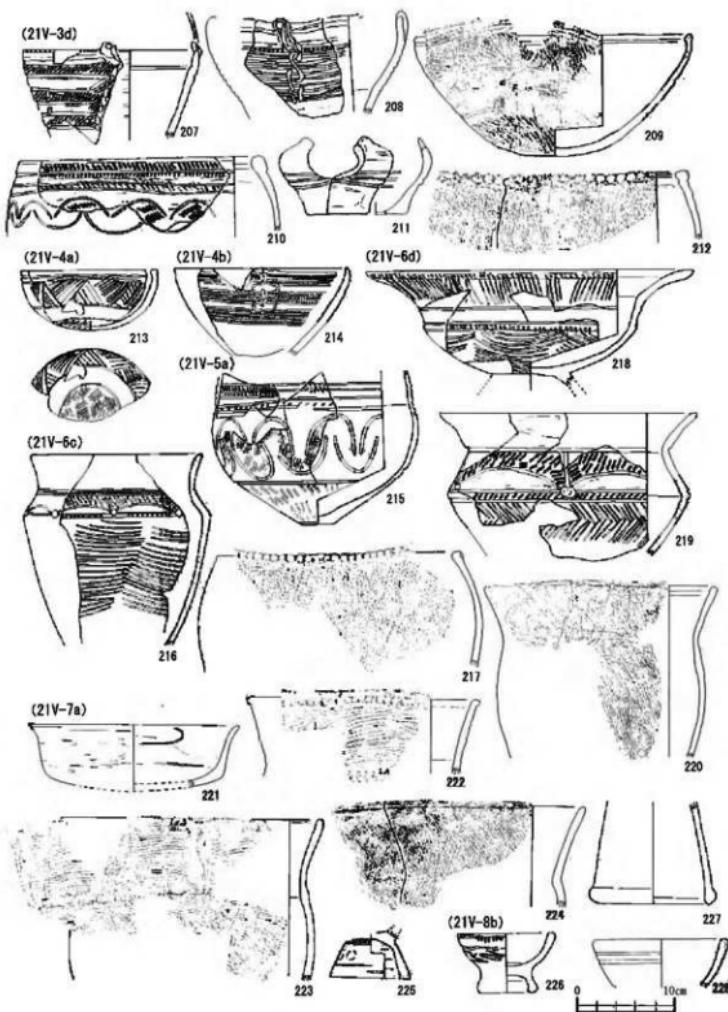
第20図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-15d~16b)



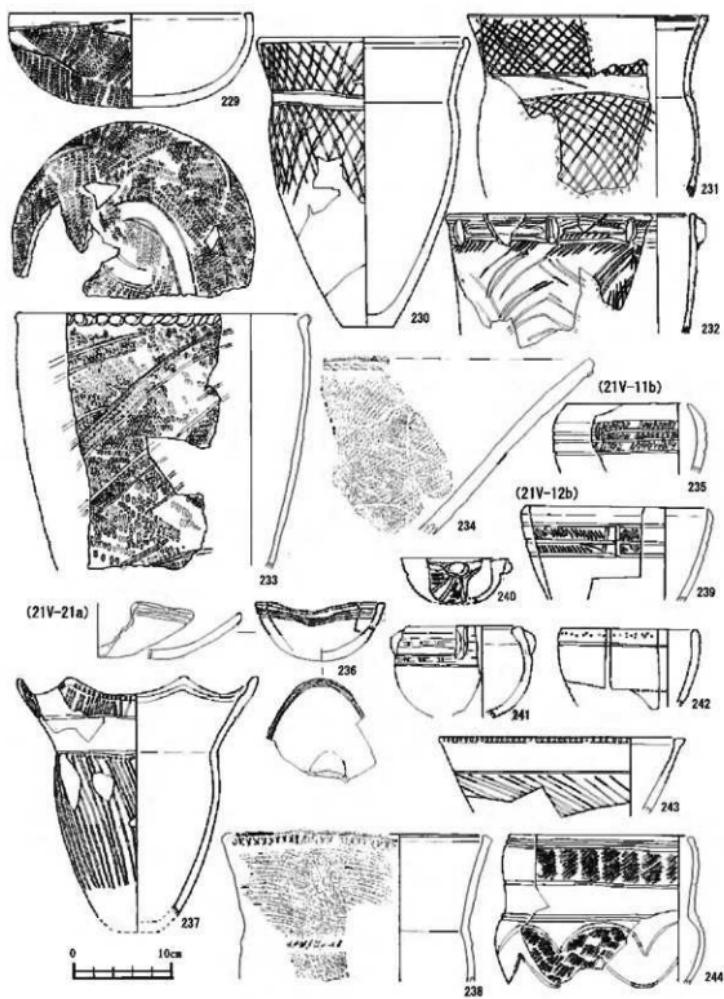
第21図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21U-160~21V-2C)



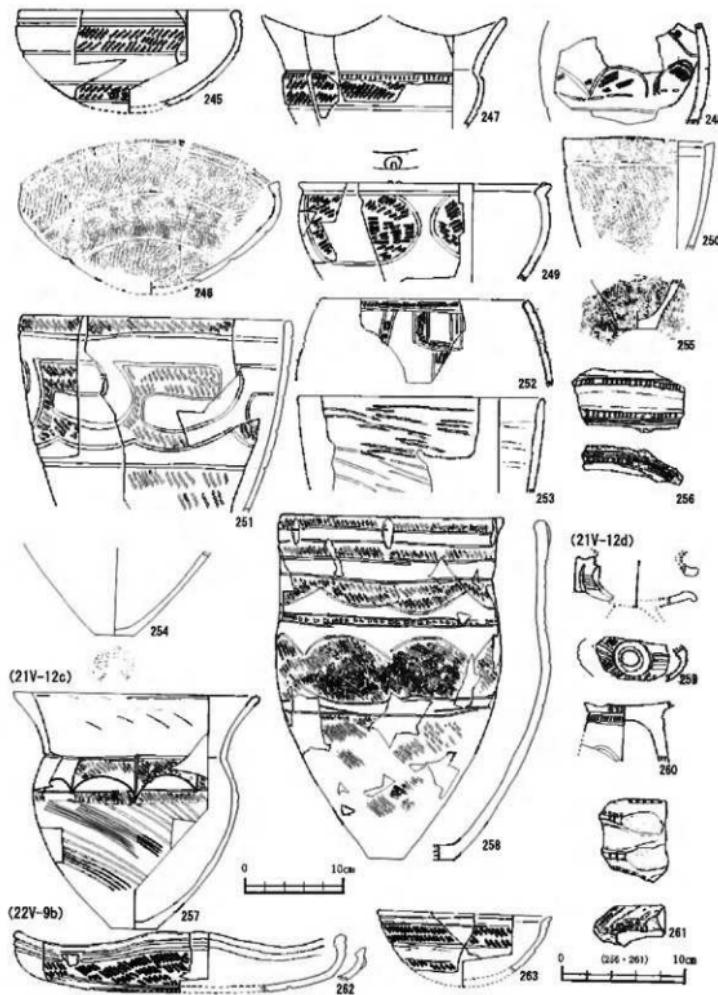
第22図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21V-2c~3c)



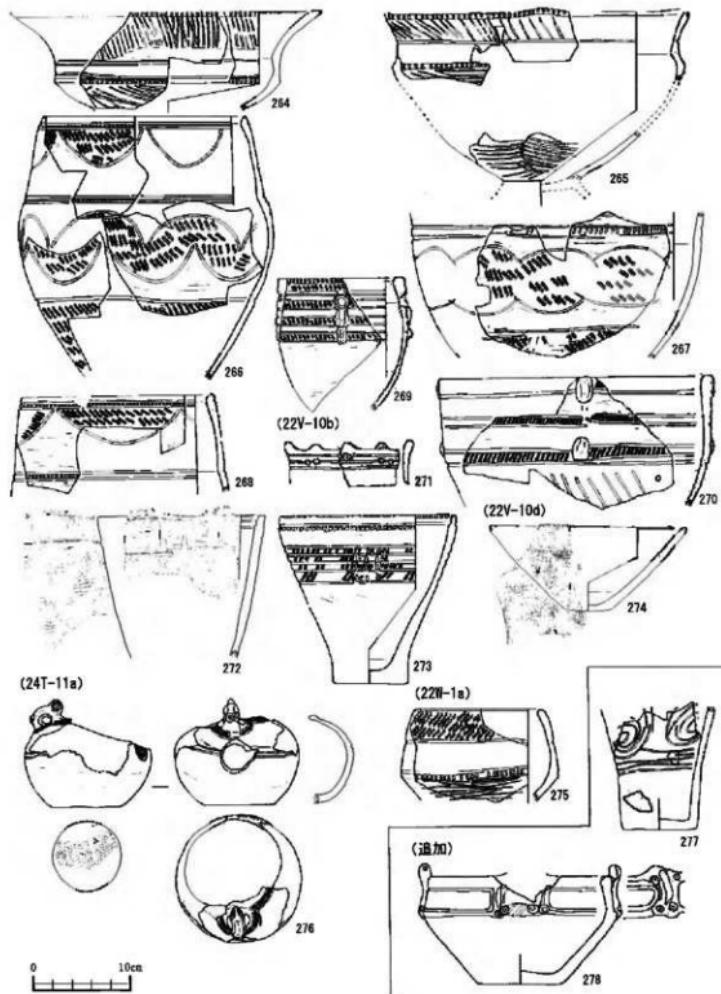
第23図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21V-3d~8b)



第24図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21V-8b~12b)



第25図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (21V-12b~22V-9b)



第26図 内野第1遺跡調査区出土遺物実測図 (22V-9b~22W-1a・24T-11a・追加)

- 5 b : 頸部無文帯の沈線が消失したもの (48・116)
- 5 c : 格子目文が斜条線に変わったもの (96・100・115・131・132)
- 5 d : 1 d, 1 a の沈線が消失したもの (49・69・101・130)
- 5 e, 波状口縁を呈し、頸部無文帯がないもの (50)

#### 第6群土器—その他の土器

- 注口土器 (122～124・211・276・年報83) 年報83は口縁下に2帯の網文帯を有し、加曾利B 3式～曾谷式に該当すると思われる。
- 吊手土器 (125・156・256・261)
- 異形台付土器 (2・184・259・260)

### 3. 内野第1遺跡の後期を中心とした集落変遷素描

内野第1遺跡の後期を中心とした集落展開について、報告書後の検討を加えて記載する（註4）。绳文時代の住居は遺跡の東南部の河岸段丘から勝田川旧河川敷にかけて展開する。加曾利E式期では10軒が想定されるが、内6軒が東側台地先端部に展開し、残り4軒が後期以降の遺構集中区に存在する。称名寺式期では26軒が想定されるが、造構集中区の西側に限定され、屋内に埋甕を伴う例が多い。堀之内1式期では19軒が想定されるが、称名寺式期と同じく、台地寄りの西側に展開し、東側の低湿地には埋設土器による墓域が形成される。堀之内2式期では8軒が想定され、M-36以東の黒色土中にJ-54・J-62等が構築されるようになり、環状に展開するようになる。旧河川敷の調整池地点からも同期の土器が出土しており、この時期に低湿地に進出した可能性が大きい。これら後期前半の住居は、拡張・反復が顕著で、環柱穴のみのものが多く、正確な住居数は掴みきれていないが、現在40軒を想定している。加曾利B 1～安行1式期では48軒を想定されるが、環状に展開し、南側と北側に集中する。加曾利B 3式～曾谷式期が14軒と最も多く、住居の中心が集落の北側になる。今回提示した包含層がこの北側に存在し、加曾利B 3式～安行1式土器が主体となるのは、このような集落展開によると思われる。安行2式～晚期前半の段階でも環状が意識されており、北側に3体合葬を伴う墓域が形成され、屋内埋甕の痕跡も認められる。集落のピークは堀之内1式期と加曾利B 2式～安行1式期で、環状集落の内側は無遺物・無遺構となる。今回提示の住居の他にまだ確定していないものがある。晚期前半のJ-20は6個の炉が検出され、J-59も5個の炉が検出されており、加曾利B式期以降の重複の可能性が強い。このような状況は、印旛沼南岸の遺跡における加曾利B 1式からB 2式期にかけておこる遺跡の増加傾向と山形土偶の大羣保有や、大形堅穴建物の構築、土器塚形成という動き（文献2）と軌を一にしている。

環状貝塚の貝塚外縁部を全掘した三輪野山貝塚では、堀之内1式期の段階では貝塚を取り巻くように環状に分布し、加曾利B式～安行式期の段階では堀之内1式期の集落の内側の貝層近

第1表 内野第1遺跡時期別住居一欄表

空屋後半住居												
柱径	柱高	形状	壁	構造	周長	± 1.7	周長%	断面	壁	構造	周長	周長%
J-4	加賀町E 2～4	円形	2基	A-302	19	J-7	加賀町E 4	楕円形	1基	A-301	A-301	
J-5	加賀町E 2～4	楕円形	2基	A-303	19	J-37	加賀町E 4	楕円形	2基	A-119	A-119	
J-6	加賀町E 3～4	円形	不明	A-204	42	J-75	加賀町E 4	円形	1基	A-206	A-206	
J-7	加賀町E 3～4	楕円形	不明	A-205	51	J-96	加賀町E 5	円形	2基	A-184	A-184	
J-10	加賀町E 3～4	円形	不明	A-115	23	J-164	加賀町E 4	円形	1基	A-164	A-164	

後期前半住居												
柱径	柱高	形状	壁	構造	周長	± 1.7	周長%	断面	壁	構造	周長	周長%
34	J-50	跡名寺1	円形	2基	A-157	23	J-155	跡名寺2	円形	不規	A-155	A-155
34	J-41	跡名寺1	円形	不明	A-158	24	J-157	跡名寺2	円形	不規	A-157	A-157
35	J-28	跡名寺1	円形	1基	A-253	25	J-201	跡名寺2	円形	1基	A-214	A-214
50	J-85	跡名寺1	楕円形	2基	A-352	243	J-221	跡名寺2	円形	不規	A-223	A-223
56	J-99	跡名寺1	円形	1基	A-370	19	J-173	跡名寺2	円形	不明	A-173	A-173
23	A-145	跡名寺1	円形	不明	A-149	15	A-117	跡名寺2	円形	不明	A-117	A-117
23	A-154	跡名寺1	円形	1基	A-154	23	A-152	跡名寺2	円形	1基	A-152	A-152
23	A-155	跡名寺1	円形	不明	A-155	23	A-153	跡名寺2	円形	1基	A-153	A-153
44	A-157	跡名寺1	円形	2基	A-167	19	A-121	跡名寺2	円形	2基	A-121	A-121
18	J-32	跡名寺2	円形	1基	A-027	44	J-75	跡名寺1～迹北1	円形	[基]	A-140	A-140
38	J-71	跡名寺2	円形	1基	A-057	44	J-79	跡名寺1～迹北1	円形	1基	A-141	A-141
19	A-121	跡名寺2	円形	1基	A-131	44	J-80	跡名寺1～迹北1	円形	1基	A-142	A-142
19	A-135	跡名寺2	円形	1基	A-135	44	J-91	跡名寺1～迹北1	円形	1基	A-167	A-167

後期後半住居												
柱径	柱高	形状	壁	構造	周長	± 2.7	周長%	断面	壁	構造	周長	周長%
2	J-14	迹之内1	円形	3基	A-022	23	J-528	迹之内2	円形	1基	A-528	A-528
3	J-15	迹之内1	円形	4基	A-040	11	J-24	迹之内2	円形	1基	A-050	A-050
11	J-28	迹之内1	円形	不明	A-057	11	J-25	迹之内2	円形	不明	A-069	A-069
13	J-30	迹之内1	円形	1基	A-068	11	J-27	迹之内2	円形	1基	A-073	A-073
14	J-29	迹之内1	椭圆形	1基	A-028	041	J-31	迹之内2	椭圆形	1基	A-038	A-038
14	J-30	迹之内1	椭圆形	2基	A-475	40	J-73	迹之内2	椭圆形	不明	A-051	A-051
17	J-33	迹之内1	円形	1基	A-632	038	J-110	迹之内2	椭圆形	不明	A-615	A-615
20	J-38	迹之内1	円形	1基	A-529	62	J-111	迹之内2	円形	[基]	A-725	A-725
20	J-49	迹之内1	円形	1基	A-529	62	J-111	迹之内2	円形	1基	A-725	A-725
35	J-66	迹之内1	円形	1基	A-569	44	J-143	迹之内2	円形	1基	A-143	A-143
35	J-67	迹之内1	円形	不明	A-054	60	A-504	迹之内2	円形	1基	A-504	A-504
36	J-69	迹之内1	円形	1基	A-128	21	J-41	後期前半	円形	不規	A-120	A-120
20	A-175	迹之内1	円形	不明	A-175	22	J-45	後期前半	円形	1基	A-182	A-182
21	A-176	迹之内1	円形	1基	A-176	23	J-46	後期前半	円形	1基	A-181	A-181
23	A-151	迹之内1	円形	1基	A-151	23	J-69	後期前半	円形	1基	A-049	A-049
22	A-163	迹之内1	円形	1基	A-163	44	J-77	後期前半	円形	1基	A-506	A-506
45	A-512	迹之内1	円形	1基	A-512	20	J-150	後期前半	円形	不明	A-190	A-190
46	A-483	迹之内1	円形	不明	A-483	44	J-174	後期前半	円形	不明	A-174	A-174
15	J-34	迹之内2	円形	1基	A-350	32	J-21	後期2～当可日3	椭圆形	[基]	A-350	A-350
20	J-35	迹之内2	円形	1基	A-357	33	J-25	後期2～当可日3	椭圆形	不明	A-354	A-354
28	J-54	迹之内2	円形	3基	A-387	33	J-25	後期2～当可日3	椭圆形	不明	A-513	A-513
28	J-52	迹之内2	円形	不明	A-327	55	J-95	迹之内2～当可日1	円形	不規	A-527	A-527

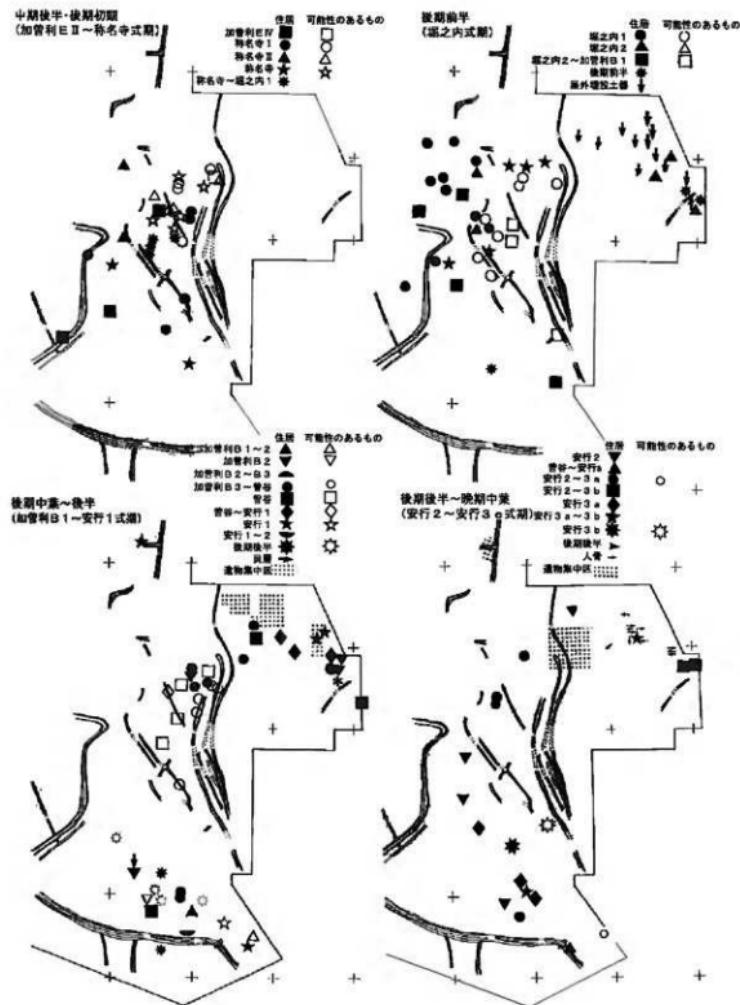
供用中住居												
柱径	柱高	形状	壁	構造	周長	± 1.7	周長%	断面	壁	構造	周長	周長%
1	J-1	加賀町E 1～2	円形	なし	A-157	22	J-64	菅谷1	方形容	なし	A-195	A-195
45	J-172	加賀町E 1～2	円形	なし	A-157	22	J-64	菅谷1	方形容	1基	A-546	A-546
47	(A-854)	加賀町E 1～2	円形	不明	A-152	52	J-113	菅谷1	円形	1基	A-592	A-592
J-1	加賀町E 2	円形	1基	A-669	19	J-134	菅谷1	円形	1基	A-134	A-134	
31	J-56	加賀町E 2	円形	1基	A-236	23	J-144	菅谷1	円形	1基	A-144	A-144
31	J-57	加賀町E 2	円形	1基	A-236	23	J-144	菅谷1	円形	2基	A-155	A-155
55	J-93	加賀町E 2	楕圆形	なし	A-333	44	J-199	菅谷1	円形	1基	A-199	A-199
23	J-48	加賀町E 2	円形	不明	A-146	31	J-540	菅谷1	円形	1基	A-540	A-540
62	J-112	加賀町E 2	円形	不明	A-327	8	J-19	菅谷1～安行1	方形容	なし	A-195	A-195
67	A-830	加賀町E 2	円形	1基	A-650	9	J-21	菅谷1～安行1	方形容	2基	A-384	A-384
31	J-45	加賀町E 2～3	円形	なし	A-324	31	J-35	菅谷1～安行1	方形容	1基	A-325	A-325
23	J-46	加賀町E 2～3	円形	1基	A-324	19	J-35	菅谷1～安行1	方形容	1基	A-324	A-324
23	J-47	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-146	10	J-22	菅谷1	方形容	1基	A-394	A-394
23	J-48	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-147	10	J-22	安行1	方形容	1基	A-389	A-389
25	J-53	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-155	23	J-22	安行1	方形容	1基	A-415	A-415
59	J-55	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-155	65	J-179	安行1	方形容	1基	A-517	A-517
59	J-104	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-557	64	J-178	安行1～3	方形容	1基	A-580	A-580
23	J-105	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-155	53	J-97	後期後半	方形容	なし	A-541	A-541
23	A-159	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-159	55	J-97	後期後半	方形容	1基	A-623	A-623
23	A-177	加賀町E 2～3	方形容	不明	A-171	59	J-197	後期後半	方形容	1基	A-600	A-600
24	A-178	加賀町E 2～3	方形容	不明	A-173	57	J-198	後期後半	方形容	1基	A-619	A-619
24	A-179	加賀町E 2～3	方形容	不明	A-170	62	J-115	後期後半	方形容	1基	A-626	A-626
31	A-530	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-530	62	J-117	後期後半	方形容	不明	A-631	A-631
50	A-349	加賀町E 2～3	菅谷1	方形容	A-349	63	J-118	後期後半	方形容	なし	A-572	A-572

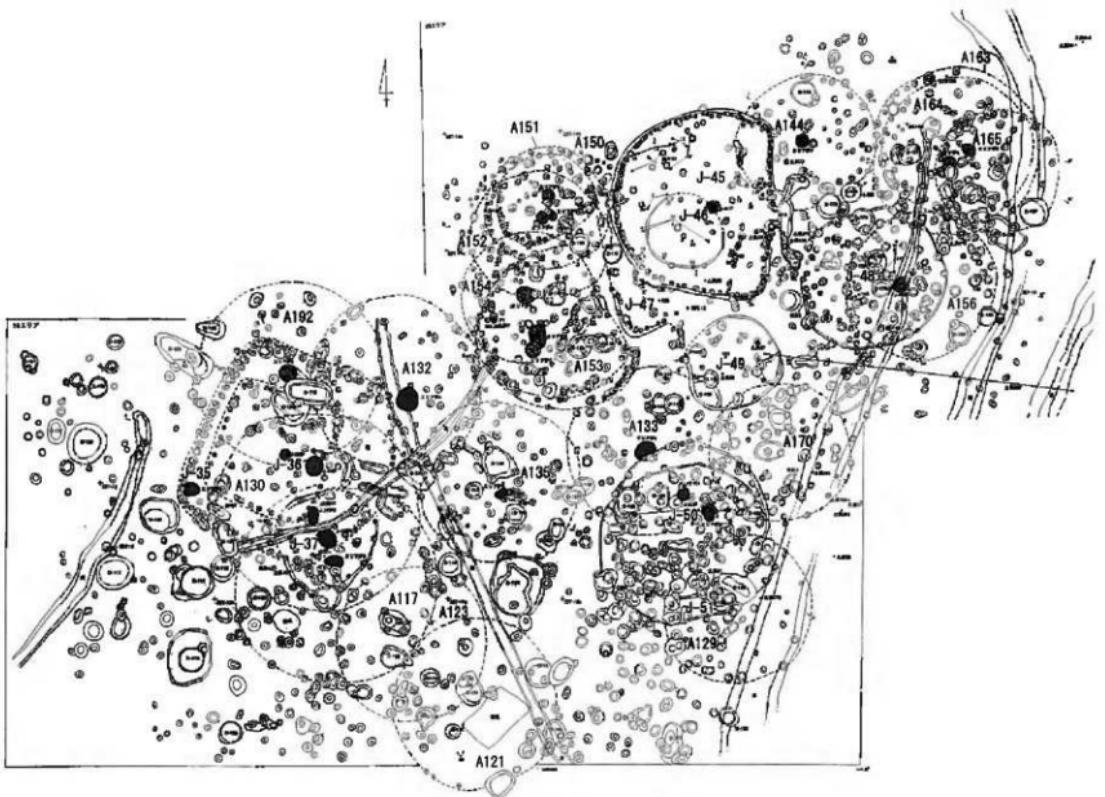
後期第一期別前半住居												
柱径	柱高	形状	壁	構造	周長	± 1.7	周長%	断面	壁	構造	周長	周長%
4	J-76	菅谷1～3	方形容	なし	A-253	55	J-96	菅谷1～3	方形容	4基	A-522	A-522
41	J-76	菅谷1～3	方形容	1基	A-253	55	J-96	菅谷1～3	方形容	1基	A-612	A-612
43	J-76	菅谷1～3	方形容	1基	A-482	98	J-102	菅谷1～3	方形容	2基	A-622	A-622
62	J-114	菅谷1～3	方形容	1基	A-529	59	J-108	菅谷1～3	方形容	不明	A-632	A-632
66	J-174	菅谷1～3	方形容	なし	A-377	61	J-134	菅谷1～3	方形容	不明	A-563	A-563
19	J-35	菅谷1～3	方形容	なし	A-350	59	J-102	菅谷1～3	方形容	4基	A-563	A-563
19	J-36	菅谷1～3	方形容	1基	A-139	58	J-102	菅谷1～3	方形容	1基	A-563	A-563
22	J-42	菅谷1～3	方形容	1基	A-145	55	J-102	菅谷1～3	方形容	不明	A-563	A-563
54	J-119	菅谷1～3	方形容	なし	A-585	60	J-105	菅谷1～3	方形容	1基	A-605	A-605
19	J-130	菅谷1～3	三角形	3基	A-130	55	J-94	菅谷1～3	方形容	1基	A-643	A-643
19	J-130	菅谷1～3	方形容	1基	A-505	58	J-94	菅谷1～3	方形容	1基	A-643	A-643
87	(A-673)	菅谷1～3	方形容	1基	A-673	55	J-94	菅谷1～3	方形容	1基	A-660	A-660
41	J-35	菅谷1～3	方形容	1基	A-350	58	J-94	菅谷1～3	方形容	1基	A-660	A-660

(4)は複数部屋で住居としたもの、A-は複数部屋で住居としたもの

(第27回ではJ-を主屋、A-を白抜で示している)



第27図 内野第1遺跡時期別住居展開図



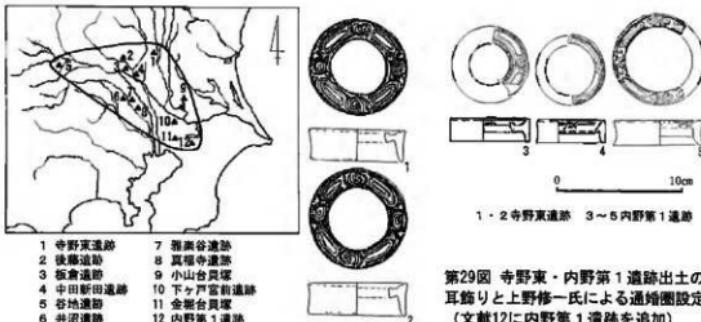
第26图 内野第1通勤通勤集中区住配圖

くに展開し（註5）、中沢貝塚も同様な傾向が認められる。また、木戸作貝塚や小金沢貝塚のように、後期前半の貝塚でも堀之内1式期の段階で環状に近い貝層を形成しており、集落の発展は堀之内1式期の段階で認められるが、地域や遺跡によって異なる可能性がある。三直貝塚や上官田台遺跡のような当該期の分析が待たれる。

#### 4. 内野第1遺跡の埋葬に関する問題点

森成秀爾氏により人骨の時期について問題が提出されている。抜歯を伴う4号・5号・10号・11号はいずれも、上・下顎の左右両方の大歯を抜歯しており、6号・7号も大歯を抜歯している。氏の抜歯形式の2C型とされるもので、県内では、荒海貝塚3号人骨と下太田貝塚1号人骨に認められるのみである（文献9）。荒海貝塚3号人骨は安行1・2式期以降とされ、当遺跡の10～13号人骨と時期的に一致する。10～13号人骨は安行1式期の住居を切り込んでいる。また、2号人骨の下から安行2式の注口土器が出土している点から、これらの人骨は安行2式期前後と捉えられる。縄文時代晚期の東北から関東・中部地方では上顎大歯のみ抜歯するO型と上・下顎大歯を抜歯する2C型があり、O型は男が多く、2C型は女に多いとの指摘（文献10）にも符合する。貝分析の水洗により、安行2式期のJ-74では上顎第2切歯が、同期のJ-114でも下顎切歯と幼児骨と思われるものが検出されている。歯骨分析資料中のJ-57・J-61（堀ノ内式期）・J-62（堀ノ内式期）からもヒトとされる骨が検出されており、堀ノ内式期・安行2式期にはもう一方で屋内埋葬が行われていた可能性がある。

埋葬に関する耳飾りの問題がある。安行2式期のJ-74から1例とJ-76から2例の対になった耳飾りが出土している。特にJ-74では小形の耳飾り（報告2分冊319図13・15）の間に扁平な石が置かれており、頭を載せた可能性を感じられる。耳飾16点と破碎された石棒の他に、前記の人の歯が出土している。J-76の1例は離れて出土した（報告2分冊320図34・35）が、1例は



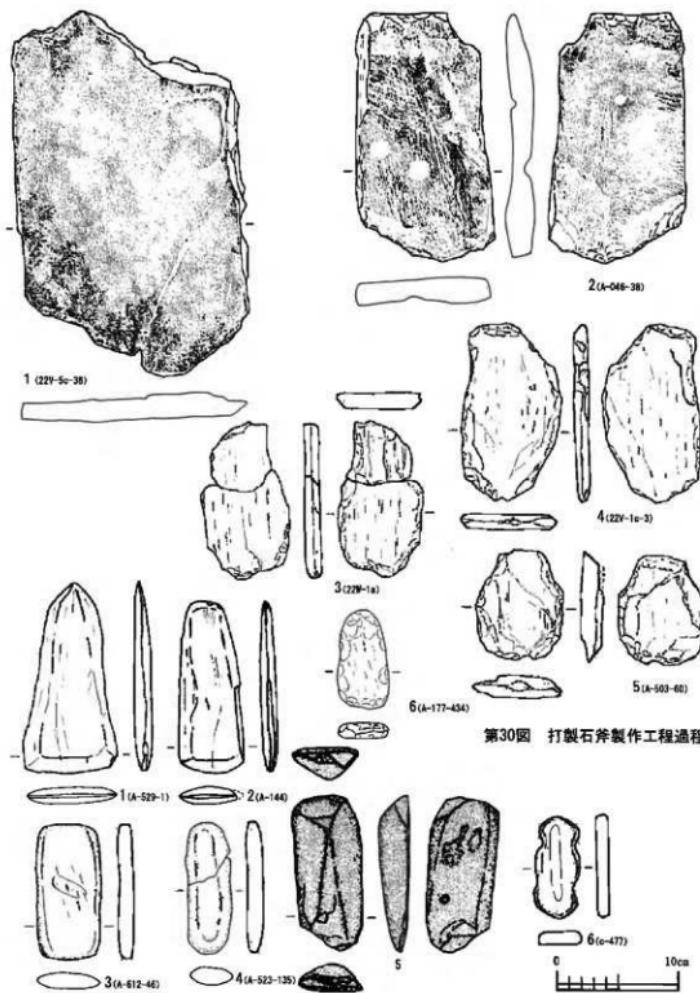
第29図 寺野東・内野第1遺跡出土の耳飾りと上野修一氏による通説図設定  
(文献12に内野第1遺跡を追加)

近接して出土しており（報告2分冊320図39・41）、着装または副葬された可能性がある。床面は焼土が堆積し、耳飾15点・土偶6点・異形台付土器6点・舟形土器2点が焼獸骨を伴って出土した。対の耳飾は全国で11例と極めて少ないが、土壙墓や配石墓からの出土が多い（註6・文献11）。人骨の検出例が殆どなく、耳飾を着装して埋葬したのか、副葬品としたのかは明確ではない。当遺跡については、住居廃絶に関する祭祀の他、埋葬に関する祭祀の検討が必要である。また、A-523（住居）出土の耳飾（第29図3）は、寺野東遺跡環状盛土から対で出土した例（第29図1・2）と同形式と捉えられる。上野修一氏は、これと同形式の耳飾が栃木県後藤・群馬県板倉・谷地・茨城県中田新田・埼玉県井沼・雅楽谷・真福寺・小山台・千葉県下ヶ戸宮前・金堀台の各遺跡から出土しているとし、通婚圏を設定している（文献12）。J-76から出土した2例の対の耳飾も雅楽谷遺跡から出土しており、大宮台地との強い関係を窺わせる。

##### 5. 内野第1遺跡の縁泥片岩を中心とする石器の問題点

内野第1遺跡出土の石棒・石剣266点の計測値を前回提示した。この内64点が縁泥片岩で、101点が結晶片岩系である。同じような性格と思われる下宮前遺跡では、316点（文献13）の石棒・石剣の内95点が縁泥片岩で、貝の花貝塚では84点中23点、堀之内貝塚では29点中21点、中沢貝塚では209点中95点が縁泥片岩である。縁泥片岩は三遺跡とも秩父長瀞産の可能性が高い（註7・文献14）。これに關係する遺物として多量の石包丁様石器（文献15）と呼称される砂岩製砥石（第31図1～5）がある。貝の花貝塚で砥石D・Eとされたものである（文献16）。1と2は磨製石斧から、4は敲石からの転用と思われ、石剣に形態・石材が一致するものがある。これらの砥石は、鹿島台遺跡において「墨形石製品」とされたものと共通点があり（文献17）、後期中葉から晩期後半まで認められる（註8）。石棒・石剣が細分化し多量に出土する時期と一致しており、研磨用に利用された可能性がある。群馬県南部の牛伏砂岩製の可能性が指摘されている（文献18）。

石棒・石剣の計測と並行して行った打製石斧の計測表を提示する（第2表）。この過程で、縁泥片岩の大形剥片から打製石斧を作製したと思われる工程が確認された（第30図1～5）。30cm×18cm大の砾石（1・2）の破片に、片面だけ粗い整形（3）→両面に粗い整形（4）→分錐形打製石斧（5）→短冊形打製石斧（6）の順で製作が行われていた可能性がある。当遺跡では417点の縁泥片岩等の結晶片岩系の破片が出土しているが、それらはこの過程で生じたものと思われる（註9）。打製石斧516点中60点が縁泥片岩、84点が結晶片岩系の石材であり、結晶片岩系が占める割合は大きくなりないが、このような工程が辿るのは、現在、結晶片岩系のみである。このような製作工程を示す資料は、井野長削遺跡（註10・文献19）でも出土しており、剥片は祇園原貝塚でも出土している（文献20）。中島庄一氏により示された横長剥片からの打製石斧製作工程と一致する（文献21）。この他に、チャート・黒曜石のサイコロ状石核が84点出土してお



第30図 打製石斧製作工程過程

第31図 内野第1遺跡出土砥石 (スクリントーンは被熱部分)



地名	位置	高さ	幅	厚さ	種類	石	材質	形状	規格	寸法	
131 331	A-570	5.0	1.0	1.0	丸棒	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	丸棒	φ100 100	
132 411	A-572	2.0	1.0	0.5	丸棒	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	丸棒	φ100 100	
133 320	A-575	3.6	0.8	2.0	224.4	丸棒	分離形	丸棒	丸棒	φ100 100	
134 316	A-579	3.4	5.1	1.2	27.3	1/2	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
135 410	A-580	10.2	4.1	1.5	61.1	4/5	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
136 414	A-580	4.7	5.5	1.6	61.1	1/2	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
138 411	A-580	10.5	5.1	1.6	64.1	1/2	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
139 334	A-580	7.0	5.1	1.7	64.0	1/2	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
140 432	A-516	8.6	5.0	2.3	180.4	丸棒	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
141 437	A-522	4.8	4.9	1.3	41.2	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	丸棒	φ100 100	
142 458	A-534	6.3	3.2	1.6	29.7	1/4	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
143 444	A-534	5.0	3.2	1.7	29.7	1/2	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
144 266	A-539	4.8	4.8	1.6	66.6	1/4	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
145 268	A-539	5.5	2.5	1.7	8.2	1/2	粗粒状安山岩	分離形	丸棒	φ100 100	
146 490	C-207	16	4.6	-	58.0	1/3	花崗岩風化岩	無縫形	C-207	211	
147 123	C-421	7.0	7.5	2.0	224.4	1/2	粗粒状安山岩	分離形	C-421	212	
148 206	C-471	9.1	6.4	2.1	16.6	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-471	213	
149 207	C-471	10.0	5.3	2.1	16.6	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-471	214	
150 221	C-475	54.16	18.1	8.2	141.7	3/4	粗粒状安山岩	分離形	C-475	216	
151 312	C-590	8.8	4.2	2.0	114.6	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-590	216	
152 164	C-580	4	10.5	3.2	20.143	1/4	花崗岩風化岩	無縫形	C-580	217	
153 423	C-709 A	6.7	5.0	1.4	91.8	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-709	218	
154 423	C-709 B	6.7	5.0	1.4	91.8	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-709	219	
155 508	C-728	1	0.0	5.3	2.7	10.0	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-728	220
156 496	C-777	6.5	5.2	1.2	75.0	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-777	221	
157 493	C-788	9.8	5.3	2.0	154.0	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-788	222	
158 485	C-822	5.8	4.4	1.8	68.2	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	C-822	223	
159 261	M-345	8.5	5.0	1.4	37.0	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	M-345	224	
160 319	M-315	5.5	3.0	1.4	2.0	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	M-315	225	
161 711	M-226	8.0	7.0	2.5	11.9	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	100	
162 119	M-032	3.0	2.5	1.7	12.0	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	100	
163 M-332		3.6	8.8	1.8	96.7	1/4	花崗岩風化岩	無縫形	M-332	227	
164 215	M-336	8.1	5.4	2.0	111.1	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	M-336	228	
165 213	M-336	8.1	5.4	2.0	111.1	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	M-336	229	
166 365	M-365	6.5	3.8	1.5	52.7	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	100	
167 90	M-95	4.5	5.0	1.5	54.2	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	100	
168 97	M-95	8.6	4.0	1.0	87.7	2/3	刃部のみ	刃部のみ	M-95	233	
169 144	M-965	5.5	3.4	1.5	153.0	1/3	粗粒状安山岩	分離形	M-965	234	
170 143	M-965	4.4	4.0	1.0	87.7	1/3	粗粒状安山岩	分離形	M-965	235	
171 143	M-965	4.4	4.0	1.0	87.7	1/3	粗粒状安山岩	分離形	M-965	236	
172 415	M-992	6.7	5.1	2.0	181.9	1/2	粗粒状安山岩	分離形	M-992	237	
173 13 N-9a		8.6	4.1	1.5	91.8	1/2	花崗岩風化岩	無縫形		238	
174 346	22 G-1a	10.3	6.9	2.2	214.7	3/4	船底板	分離形	238	494	
175 22 G-1a		8.5	5.5	1.5	195.3	2/3	船底板	分離形	238	503	
176 159	21 T-1a	12.0	7.5	1.5	182.6	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	238	541	
177 159	21 T-1b	12.0	7.5	1.5	182.6	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	238	541	
178 265	20 B-7	2.1	1.0	1.0	54.4	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	刃部のみ	100	
179 358	23 B-1a	7.8	5.1	2.4	93.9	1/4	花崗岩風化岩	無縫形	240	124	
180 91	23 S-1b	10.5	6.5	1.8	83.0	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	240	149	
181 91	23 S-1b	10.5	6.5	1.8	83.0	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	240	167	
182 431	23 S-1b	8.5	7.0	1.8	158.4	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	240	168	
183 267	23 S-1b	8.5	7.0	1.8	158.4	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	240	170	
184 422	21 T-1ed	4.4	4.5	1.0	73.4	1/2	花崗岩風化岩	分離形	240	171	
185 523	74 R-14a	11.5	4.2	2.0	136.6	面動	花崗岩風化岩	無縫形	240	172	
186 459	21 T-1a	5.3	3.3	1.4	33.2	丸棒	粗粒状安山岩	分離形	240	173	
187 75	21 T-1a	10.7	5.1	1.0	114.1	1/2	粗粒状安山岩	分離形	240	174	
188 154	21 T-1a	10.5	6.0	1.2	154.2	1/2	粗粒状安山岩	分離形	240	175	
189 548	21 T-15d	6.9	5.5	1.9	112.0	2/3	粗粒状安山岩	分離形	240	176	
190 19	21 T-16a	3.5	6.5	1.5	52.2	1/4	四線状安山岩	分離形	240	177	
191 79	21 T-16d	6.0	5.5	1.2	56.5	1/2	粗粒状安山岩	分離形	240	178	
192 472	21 T-16d	4.7	5.2	1.2	53.8	1/2	粗粒状安山岩	分離形	240	179	
193 24	22 T-1a	8.6	5.5	1.8	106.9	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	240	180	
194 22 T-1a		8.6	5.5	1.8	106.9	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	240	181	
195 452	22 T-2c	6.4	4.6	1.0	125.1	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	240	182	
196 22 T-3c	11.3	3	2.1	148.0	1/4	花崗岩風化岩	無縫形	240	183		
197 447	22 T-2c	8.1	3.1	1.2	48.8	1/2	花崗岩風化岩	無縫形	240	184	
198											
199											
200											
201											
202											
203											
204											
205											
206											
207											
208											
209											
210											
211											
212											
213											
214											
215											
216											
217											
218											
219											
220											
221											
222											
223											
224											
225											
226											
227											
228											
229											
230											
231											
232											
233											
234											
235											
236											
237											
238											
239											
240											
241											
242											
243											
244											
245											
246											
247											
248											
249											
250											
251											
252											
253											
254											
255											
256											
257											
258											
259											
260											
261											
262											
263											
264											
265											
266											
267											
268											
269											
270											
271											
272											
273											
274											
275											
276											
277											
278											
279											
280											
281											
282											
283											
284											
285											
286											
287											
288											
289											
290											
291											
292											
293											
294											
295											
296											
297					</td						





り、剥片が集中して認められる地点があることから、石器の製作地点が存在したと思われるが、製品は102点で長期定住集落では少ない。

#### 6. 横橋貝塚・井戸遺跡・内野第1遺跡

横橋小学校の東西には浅い谷が入り込み、この谷で区切られた台地上の一畠田・井戸・居煩・外山・蓮蓬の各遺跡は同一遺跡と捉えられる（第2図）。分布調査では加曾利E式が主体であるが、調査でも明確なように、加曾利B式期まで継続する。井戸遺跡の貝層出土の「対弧文」土器は、内野第1遺跡D-369でも出土している（第6図1）が、一段階新しい可能性がある。

前号では、（稻毛浜・幕張浜）→横橋貝塚→井戸遺跡→内野第1遺跡→千代田遺跡で貝の搬入ルートを想定した。横橋貝塚と井戸遺跡は同じ花見川支谷に位置しているが、最奥部の子和清水遺跡では、後期中葉～晚期前半の土器の出土はみられない（註11）。井戸遺跡と内野第1遺跡の分水嶺上には加曾利B式期の小規模遺跡が点在しており（註12）、遺跡の在り方から長沼池ルートよりも西側の横戸町支谷のルートが主に使われた可能性がある。千代田遺跡周辺でも内黒田遺跡群や西山遺跡等の遺物ブロックのみの小規模な遺跡が多く認められる、阿部芳郎氏は核となる千代田遺跡の森林資源採取等の臨機的な活動の場として捉えている（文献22）。内野第1遺跡から千代田遺跡の間には、印旛沼に注ぐ支谷の谷頭が多く、後期後半の小規模な遺跡が多くある。これらの遺跡は同遺跡を結ぶルートを表している可能性がある。

近年、内野第1遺跡周辺にも断片的ながら、縄文時代晚期の土器が出土している遺跡がある（註13）。後晚期の拠点集落が、各遺跡より半径4~5kmに位置している点からも、北西部に広がる習志野駐屯地内に大きな遺跡が存在する可能性は高い。

#### おわりに

内野第1遺跡には多くの問題がある。人骨については既に述べた。次に遺構の問題がある。註4でも触れたが、調査段階においては、炉と壁柱穴が住居跡決定の決め手となるが、削平を受けた部分もあり、多くの場合、プランと時期決定に困難を極めた。このような状況は後・晚期の大形遺跡に共通する。武士遺跡では調査段階での認識を優先させ、炉のない柱穴群でも積極的に住居と捉えた結果、加曾利E III～E IV式期100（106）軒・称名寺式期17（21）軒・堀之内1式期205（213）軒・堀之内2～加曾利B式期35（39）軒の合計357（379）軒と捉えている（（口）は可能性のある住居を含めた数 文献23）。今回は調査段階で捉えた住居を加え集落変遷の分析を行ったが、今回提示したのはあくまでも素描であり、J-20やJ-59の多数軒の重複関係を検討した上で、新たな分析を行いたい。

内野第1遺跡の基礎資料の提示は今回で終了する。調査区一括遺物、生産石器の基礎データーの提示等、残されている問題はまだまだ多い。内野第1遺跡の調査開始は、守野東遺跡や井戸作遺跡とほぼ同じ頃であり、盛土遺構という概念すらなかった。近年、これらの報告書が相次

いで刊行されてきており、盛土と共に集落下の低地部分に、木組・木道・水堀遺構がセットとして検出される例が多い、埼玉県石神貝塚や後谷遺跡、千葉県の堀之内貝塚の谷部分の道免き谷津遺跡でも検出されており、金堀台貝塚下の桑納川遺跡群高本弁天橋地点も、後期から既期の土器が発見されている。これとは別に、埼玉県赤城遺跡や千葉県西根遺跡のように集落から離れた場所にこれらの遺構が検出される例もある。内野第1遺跡は前者の例であるが、調整池地点も含めた遺跡の見直しが必要である。今後はこれらの問題を含めて検討を加え、内野第1遺跡の集落像を明らかにしていきたい。

今回の提示資料は、報告書を基礎として、調査段階の見解を加えて行った。住居の時期決定については、整理段階で古谷涉氏により行われた、個々の柱穴内出土遺物の図面および時期決定を参考としている。これまでの資料提示には、前号で記した整理補助員の他に、調査を含めて青沼道文・横田正美・飛田正美・鶴岡英一・倉田義広の各氏に御指導・御協力頂き、加曾利貝塚博物館の方々には発表の機会を与えて頂いた。また、今回の井戸遺跡については湖口淳一氏から多くの御教示を戴いた。心から感謝申し上げる。

(財団法人千葉市教育振興財團埋蔵文化財センター)

#### 註

1. 報告書の「一枚田遺跡」においては遺物の提示と遺構の存在を示唆しているのみであるが、「遺跡の位置と歴史的環境」の項目内において、一枚田遺跡第II地点から加曾利B式期の貝ブロックが検出されたと、現地所見で記載した。
2. 調査担当者湖口淳一氏の教示による。試掘地点の字名が「いかづち」である所から「雷電貝塚」と仮称していたとのことである。
3. 1/1000の地形図によれば、標高14mラインが半島状に勝田川に張り出しており、遺構はここに集中する。基盤は砂質の黒色土で、調査時の台風等による滑水時にはこの面が最初に水が引き、今回提示した包含層部分は滑水状態のままでポンプアップを行いながらの調査を行なった。遺物の出土状態をみると、南西から北東に緩く傾斜している。なお、21V-7dから完全形の石棒（報告第2分冊284図10）が出土しているが加曾利B式に伴うと思われる。
4. 調査段階では、壁が裏され壁柱穴と炉だけのものや、壁柱穴のみのものも積極的に住居と捉えた。これらについては、密な壁柱穴や一定間隔で巡る壁柱穴を手懸かりとしてプランを推定し、時期決定は、炉および柱穴出土の遺物で行わざるを得ない。その結果が県史で記載した住居175軒という数字である。報告書では、これらの推定線の大半が欠落しており、数も125軒と減じている。「44エリア（中略）エリア炉1・2・3を有する住居の推定も可能である・・・」という記述はそれらを指す。今回はこれらを再考し、検討したものを持続する。西側の遺構密集区の大半は称名寺式～堀之内1式期のものと思われるが、A-169・A-361のように加曾利B式期のものも存在し、同期の段階で住居が環状の分布することが捉えられた。

これらの捉え方については、年報18で簡単に述べてある。

5. 流山市教育委員会 2004 「—縄文時代後・晩期の貝塚と環状盛土遺構—第5貝塚と斜面盛土の調査から』『第2回 三輪野山貝塚発掘調査現地説明会資料』による。三輪野山貝塚については、同教育委員会小川勝和氏から多くの資料を頂いた。記して感謝申し上げる。
  6. 文献11によれば、遺構内に対し出土した耳飾は、宮城県下ノ浦（土壙）・群馬県深沢（19号配石下・長野県宮中（石棺墓）・栃木県寺野東（環状盛土－3例）・埼玉県赤城（完形土器集中地点－2例）・山梨県金生（石棺墓）・長野県岡ノ峯（石棺墓）・長野県久保土田（土壙）の8遺跡11例であり、この他に千葉県三輪野山貝塚からも土壙出土例があるようである。また、寺野東遺跡の環状盛土から出土した耳飾には、離れた地点の接合例があり、J-76と共にしたもののが認められる（文献24）
  7. 貝の花貝塚は粘板岩61：緑泥片岩23、堀之内貝塚は8：21、中沢貝塚は61：23、下ヶ戸宮前遺跡は114：95である。下ヶ戸宮前遺跡の総数は文献13、註のデーターは文献14による。
  8. 加曾利B式期のJ-60からも出土しており（紀要32号8図13～15）、後期中葉から認められる。
  9. 水洗・注記段階のデーターで実際は更に多い。調査段階では石棒・石剣の製作によるものと考えたが、長さ、厚さが不足し、未完成の出土がない点から捉え直した。また砂岩が81点、砥石が140点出土している。磨製石斧・石鎌・土製品は報告書・年報の実数にほぼ近い。
  10. 第4次調査103図16・17と107図14、第6次調査1号住居出土の24図36、第8次調査29号土壙出土の29図121～131とマウンド最終の34図21。
  11. 子和清水遺跡では称名寺式期の最終末期の土器が出土しているが、それ以降は、晩期後半の前浦～荒海式期以前の土器が欠けている。
  12. 子和清水西（諸磾・安行2）、こてはし台北（加曾利B）・大日神社裏（加曾利B）の各遺跡がある。この他に内山遺跡（加曾利E）がある。
  13. 高津新山（荒海）・本郷台（浮縫文）・川崎山d（晩期後半）・実初2丁目駅前（前浦）・屋敷貝塚A地点（晩期後半）の各遺跡
- 文献
1. 佐藤順一 1987 「一枚田遺跡』『千葉市子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡』（財）千葉市文化財調査協会
  2. 阿部芳郎 2005 「貝食文化と貝塚形成』『地域と文化の考古学 I』
  3. 田中英世・古谷涉 2001 『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』（財）千葉市文化財調査協会
  - 4 a. 田中英世 2004～2006 「千葉市内野第1遺跡出土の縄文時代資料補遺（1）～（3）」『埋蔵文化財調査センター年報』16～18 （財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
  - b. 田中英世 2005 「千葉市内野第1遺跡出土の石棒・石剣』『貝塚博物館紀要』第32号

千葉市立加曾利貝塚博物館

- c. 田中英世 2006 「千葉市内野第1遺跡出土の縄文時代後期の土器群」『貝塚博物館紀要』第33号 千葉市立加曾利貝塚博物館
5. 林田利之 1999 『吉見台貝塚A地点』(財)印旛郡市文化財センター
6. 菅谷通保 2001 『下太田貝塚』(財)總南文化財センター
7. 鶴岡英一・安井建一 2005 『市原市西広貝塚』(財)市原市文化財センター
8. 小林信一 2005 『印西市西根遺跡』(財)千葉県文化財センター
9. 春成秀爾 2004 「抜當」『千葉県の歴史 資料篇 考古4(遺跡・遺物・遺構)』千葉県
10. 設楽博己 1991 「最古の蓋棺再葬墓一根古屋遺跡の再検討ー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集  
春成秀爾 1991 「抜當」『日本考古学事典』三省堂
11. 吉田泰幸 2003 「縄文時代における土製梳状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』19
12. 上野修一 1999 「内謙の道ー峠の狩人ー」『海を渡った縄文人』小学館
13. 石田守一 2005 『下ヶ戸宮前遺跡』『我孫子市史 原始・古代・中世』
14. 柴田徹 2003 「鎌ヶ谷市内の縄文時代遺跡から出土した石器の石材について」『鎌ヶ谷市史研究』16
15. 鈴木公雄 1970 「石包丁様石器について」『史学』第43巻1・2号
16. 関俊彦他 2002 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会
17. 白井久美子・小林清隆 2002 「縄文時代後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器ー鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介ー」『研究連絡誌』第63号(財)千葉県文化財センター
18. 大工原豊 2004 「生産用の石器」『千葉県の歴史 資料篇 考古4(遺跡・遺物・遺構)』千葉県
- 19 a. 戸谷教司 2004 「井野長削遺跡(第4次調査)」(財)印旛郡市文化財センター  
b. 田中大介 2004 「井野長削遺跡(第6次調査)」『平成16年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書』佐倉市教育委員会  
c. 田中大介 2004 「井野長削遺跡(第8次調査)」『平成15年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書』佐倉市教育委員会
20. 忍澤成規 1999 『祇園原貝塚』(財)市原市文化財センター
21. 中島庄一 1981 『新藤遺跡』多摩市教育委員会
22. 阿部芳郎 2001 「四街道市八木原貝塚の基礎的研究」『四街道市の文化財』第25号
23. 加納実 1998 『市原市武士遺跡』(財)千葉県文化財センター  
加納実 2000 「集合的居住の崩壊と再編成」『先史考古学論集』第9集
24. 江原英 1997 『寺野東遺跡V』 横木県文化振興事業団

（追記）

- 昭和48年の分布調査で、花見川下流の東大グランドから安行2～3a式土器が採集されている（第32図）。近隣には丸木舟が出土した落合遺跡があり、加曾利B式期とされている。横櫛貝塚との強い関係が窺える。
- 鈴木泰行氏（ひたちなか市文化・スポーツ公社）より内野第1遺跡の石棒・石劍を実見して頂き、茨城県北部・鮎川層の粘板岩製の可能性があることが指摘された（報告2分冊286図-16・287図-23・13・288図17）。これらは文様等においても、茨城県北部のものと共通性をもつ。茨城県北部の上の代・本覚・泉坂下・上高津の諸遺跡からは鮎川層の粘板岩が出土しているが、千葉県中沢貝塚資料は鮎川層以外の粘板岩製との結果が出された。また、うならすず遺跡の石棒が群馬県恩賀遺跡製作のものであるとの指摘を受けた。記して感謝申しあげる。

柴田徹 2005 「本覚遺跡出土石器の石材について」『本覚遺跡の研究』

- 『貝塚博物館紀要』第31号の人面付土版の追加資料を補足しておく  
千葉県佐倉市井野長割遺跡 文化庁 2004 『発掘された日本展2004』  
佐倉市宮内井戸作遺跡 小倉和重 2003 『宮内井戸作遺跡発掘調査概要』（財）印旛都市文化財センター  
成田市殿台遺跡 喜多圭介他 1984 『成田市郷部北遺跡群調査概要』 成田市郷部北遺跡調査会  
茂原市下太田貝塚 背谷通保 2003 『千葉県茂原市下太田貝塚』（財）總南文化財センター  
茨城県玉造村部室貝塚 小沢真智子 1975 「茨城県玉造村部室貝塚採集の掲文中～晩期資料について」『霞ヶ浦文化研究』創刊号  
前山村西塙遺跡 川上博義・阿久津久 1975 「縄文時代における文化の領域的研究」『茨城県歴史館報』第3号 茨城県歴史館  
埼玉県白岡町清左衛門遺跡（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006 『埋文さいたま』44



第32図 東大グランド採集遺物